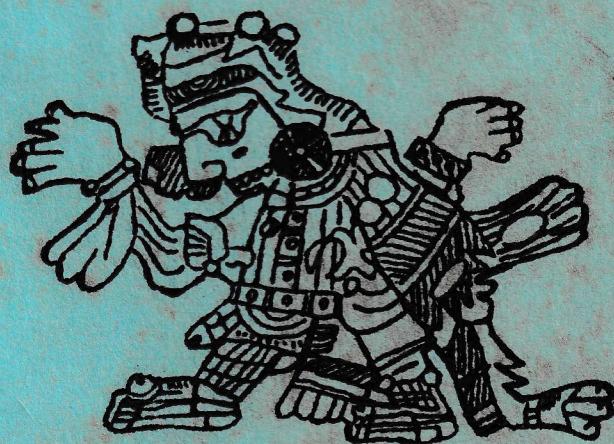


探検部報

1967年7月

オ2次 パラワン島調査隊一般報告
安家川調査隊一般報告



No.15

横浜市立大学探検部

卷頭言

合田寿

目 次

卷 頭 言 次

I パラワン島調査隊一般報告

序

1. 隊	組	動	織	日	圓	報	告	告	告	告	(概 略)
2. 行											
3. 地											
4. 食											
5. 医											
6. 装											
7. 學											
8.											

II 安家川調査隊一般報告

序

1. 隊	組	動	織	日	圓	報	告	告	告	告	程
2. 行											
3. 地											
4. 食											
5. 補											
6. 装											
7. 水	水	寝	洞	窟	医	報	探	檢	告	し	て
8. 客	A. 安家煙子の実態	B. 水質調査の概略									

(峰岸 常之 大江 達彦)

III 神津島合宿について

大学祭を省みて(座談会)

探偵会一探検部運動史の検討

今後の部活動への問題提起

白 球 中 扇

薦評 生と死の妙薦

部 史

41 ~ 42 年度活動報告

部 編 賈 名 後 記

(合田 環)	1
	2
(合田 環)	3
(鈴木 光)	4
(井堺 邦明)	7
(安藤 嵩)	10
(錢不 光)	12
(出羽 寛)	14
(隊員全員)	17
(名和 裕美)	22
	23
(新井 静男)	24
(藤山 正二郎)	26
(大橋 正敏)	26
(藤山 正二郎)	28
(大橋 正敏)	30
(小林 虎二)	32
(大江 達彦)	33
(遠藤 経一郎)	34
	36
(峰岸 常之)	40
(大江 達彦)	47
(鈴木 宏尚)	50
(大橋 隆司)	51
	53
	54
	56
	62

I. パラワン島調査隊一般報告

序

—— 合田 淳

フリピン共和国の西部ルリン島とボルネオとの間に位置する南北450m
幅は最大で50kmというパラワン島はオリピン第4の大島である。面積
11790km²、人口約15万人であり南部に回教徒のモロ族、中部にタクバヌア
族、パラワノス、中北部にバタク族、北部にビサヤ族が住み人種的にも文
化的にも著しく多彩である。我々が調査対照としたバタク族はネグリート
に属すると言われ、山中で原始狩猟採集及び焼畑を行っており、現存する
東南アジア最古の民族とも言われる。彼らはパラワン島中東部、州都のア
エルト・プリンセサから北東に60kmから90km離れた海岸からさらに山中に
3km～10kmはいる所に住んでいる。1966年8月に約3週間、我々横浜市
立大学や2次パラワン島調査隊5名はこのバタク族を中心として、民族調
査を行い、同時に彼等の生活の場にみける生物調査を行った。我々はこの
調査を通して彼等の生活や文化や社会組織等を明らかにし、資料として提
供すると共に、彼等の将来の問題として急激に変化しつつある環境に対し
ていかに効果的に適応してゆけるかという問題を考察する事を目的とした。
フリピンでは約80種以上の異った言葉を話す文化的、宗教的、社会的
に異った民族が3000もの島々に住んでおり、相互間のコミュニケーション
も少く、バタク族に関して言えば、彼等の名前も正確な人數もつかめて
おらず、もちろん何ら教育もなく、ついでない。いかにしくこうした相違を
克服し、国家としての統一性を保つていくかというのも大きな問題である。
現在フリピン政府では国立博物館を中心とした各民族の社会調査等が行な
われ、漸次進んでいるが、数も少く、最も原始的なバタク族に関しては二
うして調査はなされていない。それにも満足する調査がまだなされておらず、
訓練の不足、短い調査期間等から充分に人々に発展的に継続されない
は残念だが、平和調査がさらに色々な人々に期待される事である。
これを願つてやまないものである。微力なりが生の集りであります多大な御
の成績を収められたことである。また、人類学教室の鈴木不二郎先生、和竹先生、
大文化人類学教室の馬淵東一先生、民俗学者の三好明十氏、資金面を始めとす
諸先生、関係各会社、及び私自身を始めとする学内諸先生、その他の教員
に限りないほど多くの人々の御協意によるものであり、ここに心から御礼
を申し上げます。

1. 隊組織(学年は当時)

隊長 合田 寿 学術 商学部3年 民俗担当

川崎市中幸町3の26, 737
TEL. (川崎) 51-8024

副隊長 鈴木 光 医療・施設 文理学部3年 生物担当

横浜市金沢区六浦町1063 永恵方
TEL. (横浜) 70-9216

出羽 寛 装備 文理学部3年 生物担当

逗子市逗子ケ丁目12の20

井塙 邦明 渋外・会計 文理学部2年 民俗担当

横浜市保土ヶ谷区仏向町1324

安藤 審 技術・食糧 商学部2年 民俗担当

東京都杉並区下高井戸2の552

2. 行動日程

— 鈴木 光

S.41. オニセパラワン島調査準備会結成
隊員募集

- S.41.4.11. オニセパラワン島調査隊員決る。(合田・鈴木・出羽・井塙) オニセパラワン島調査隊結成
4. 13. M.M.汽船予約、計画書印刷へまわす。
4. 15. 総会にてオニセパラワン島調査隊正式承認さる。
4. 18. 隊員に安藤が加わること、部会で承認
計画書完成
4. 19. 学長に invitation letter を依頼
4. 22. オ一回シンポジウム
5. 6. Puerto Princesa Rotary Clubへの手紙発送
5. 7. オ二回シンポジウム
5. 14. オ三回シンポジウム
5. 15. 計画書改正版完成
5. 27. 計画書、各関係団体へ発送
全員の pass port 申請終る。
5. 30. 進交公團係の 資金あつめ始まる。
6. 10. 探査会員への援助願い発送
6. 11. オ四回シンポジウム
6. 18. invitation letter 発送 (Rotary, HTC)
オ五回シンポジウム

6. 23. 都立大菊地氏を訪問
 6. 24. 破傷風予防注射（オ/回）コレラ予防注射（オ/回）
 6. 25. 探査会・探査部懇談会（於医学部ロビー）
 調査について討論
 6. 27. 都立大菊地氏訪問
 6. 29. フィリピン大使館へVisa申請に行くも書類不足で申請できず。
 6. 30. M.M.入船料の支払をする。
 7. 1. フィリピン大使館へVisa申請に行く。
 7. 5. Visaがとれる。
 7. 7. 教授会に計画書を提出。
 7. 9. 東京歩外始まる。
 7. 12. Holy Trinity College よりO.K.の電報くる。
 7. 15. 医療薬品そろう。
 7. 16. 装備点検。
 7. 18. オニ次パラワン島調査隊歓送会。
 7. 19. パッキング、あいさつ状発送。

 7. 21. 横浜港よりLao号で出発
 7. 25. Hong Kong 着
 7. 27. Hong Kong 発

 7. 29. Manila 着
 Shellborn Arms Hotel にあちつく。
 7. 30. 積行棟の手札をする。
 7. 31. 動物園見学
 8. 1. F.E.U. 訪問
 8. 2. U.S.T. 訪問（マリアに会う）
 8. 3. 鈴木、病気で Charity Hospital へ行く。
 8. 4. 植物発送
 8. 5. Manila 発 - Puerto Princesa 着
 ロータリークラブ歓迎パーティ
 8. 6. 出羽・井埜、ジムと偵察に行く。他はElementary, H.T.C.へ行く。
 8. 7. iwahig のプールへ水泳に行く。
 8. 8. Elementary school へ行く。
 8. 9. Puerto Princesa 発 - San Rafael 着 Ben 紹介。
 8. 10. San Rafael 発 - Tagnaya 着
 8. 12. Tagnaya 発 - San Rafael 着
 8. 13. 護衛兵の交代
 8. 14. 学校の先生が海水浴に来る。
 村長宅のdinner に招待をうける。
 8. 15. San Rafael 発 - Sumuroa 着
 8. 17. Sumuroa 発 - San Rafael 着
 8. 19. San Rafael 発 - Lipao 着
 8. 22. 護衛兵の交代
 8. 23. Lipao 発 - San Rafael 着
 8. 24. 合田・鈴木・安藤・井埜 San Rafael 発 - Tagnaya 着
 出羽は San Rafael に残る。

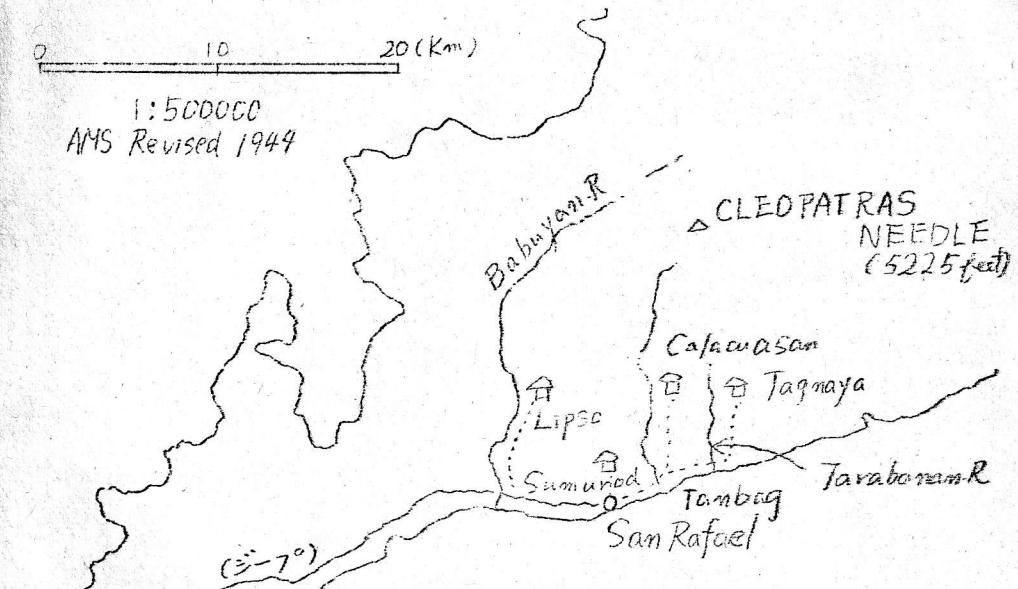
- 8.25 Jagtaya発 — San Rafael 着
 合田・井埜が病氣になる
 8.27 出羽・鈴木・安藤 San Rafael → Calacuasan
 合田・井埜はSan Rafaelに残る
- 8.28 Calacuasan → San Rafael 着
 8.29 San Rafael → Puerto Princesa 着
 8.30 移民局へ行く。
 8.31 Elementary school・HTC 訪問
 HTCで送別会を開いてくれる
 Rotary Clubの会合に出席。
- 9.1 Puerto Princesa - Manila
 shellborn arms hotel にいり
 9.3 出羽 病氣になる
 Sienna College にいり
 9.5 Manila 発
 9.7 Hong Kong 着
 9.8 Hong Kong 発
 9.11 神戸港着 — 伊丹 — 羽田
 9.12 NHK スタジオ 102 出演
 学長室訪問
 9.16 進行会訪問

42. 7月中旬 報告書発行予定

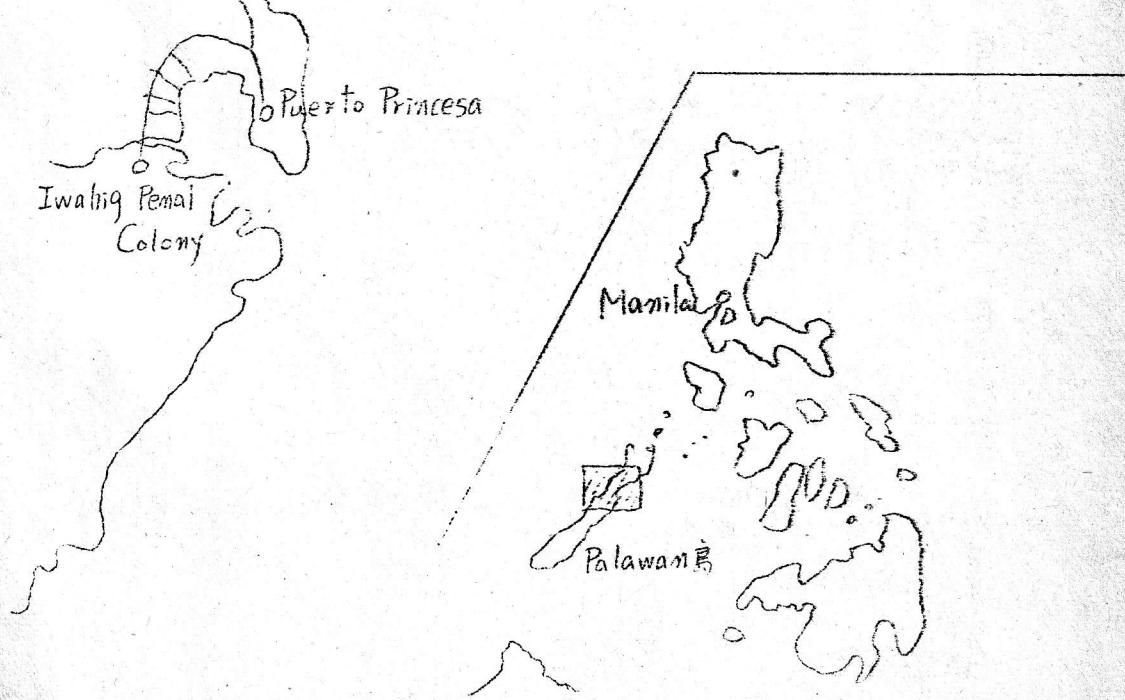
F.E.U Far East University
 U.S.T University of Saint Thomas
 H.T.C Holy Trinity College.

0 10 20 (Km)

1:500000
AMS Revised 1944



HONDA BAY



第2次パラワン島調査隊会計報告

井笠邦明

収入	支 出	帰口後收入
個人負担金	渡航手続費	朝日新聞掲載料
初次パラワン島の残金	予防接種	週間朝日
進交会	諸外費及び雜費	朝日ビル
横浜市市長	備食料費	アサヒ芸能社
横浜市議長	計	双葉文習研究社
神奈川県知事		進交会東京支部
神奈川県議長		新堀豊彦氏
市大文化部連合会		税金払い戻し
市大生協		学校より
探検部先輩		計
進交会会員		150,337円
市大諸先生		
部員		
計		

収入合計 742,437円

支 出	国 内
渡航手続費	241,920
予防接種	7,500
諸外費及び雜費	4,015
備食料費	15,690
計	15,540
	6,913
	291,578円

國 外 者
現地への土産費
交通費(通信費・食費)
計

マニラ (単位ペソ)
食費(通信費・交通費その他)
宿泊費(11日間)
飛行機往復運賃
(マニラ→P.P) 48,400
air cargo 7,600
計 189,700

パラワン島内(単位ペソ)
宿泊費(含食費7泊) 51,400
現地調達食料費 15,700
通訳雇用費(22日間) 10,000
民人及び動物の譲渡費 1,000
通信費飲食費その他 3,0400
計 108,500

帰口後支出

隊員の健康診断	7,018
入院費(4人)	109,000
現地の方へのみなし	13,600
カメラ修理	6,800
写真現象鏡増費	2,141
雜費	9,322
計	146,881

支出合計 719,585円

収入、支出差引き残高

$$742,437 - 719,585 = 22,852$$

残金 22,852円

以上が第2次パラワン隊が発足してから現在までの会計報告であるが、摘要欄の内容についてはほつきり分からぬ所があると思うので説明を加えたりと思つ。

まず、収入の欄から説明すると、第1次パラワン隊の残金とあるが、これは、この年の第1次パラワン隊が計画を遂行できず、日本に帰ってきたため、ほとんど資金面では残ってしまった。そこで各方面からの寄付金を貯金してみて、今回の資金の一部にしたのである。又、帰口後収入でよく出でるのは雑誌出版社からのお收入は主として、写真の掲載料によるものである。税金よりの払い戻しとあるのは、雑誌社から送られてくる原稿料は割の税金を差し引かれてるので、その割の税金分である。しかし、この甲告をするのが一部遅れてしまつて原稿料の全ての返還金ではない。

最後の項の学校よりとあるのは、隊員4名の者がマラリアにかかり、その治療費の一部としたものである。

支出の面では、マニラ、及びパラワン島内での単位ペソとあるのは、アリビンの貨幣単位であり、1ペソは日本円にして約93円である。しかし、アリビン内における支出の合計、2982ペソに93円をかけて日本円の支出とした。ちなみに、アリビンでの総支出を日本円に換算すると、27326円となる。これと他の支出を合計したのが総支出となつてるのである。最後に、残金22,852円あるか、これは報告書作成のために使う予定である。

食糧報告書

— 安藤 崑 —

今回の食糧計画では、案内人、護衛の欠陥のことをほざき考慮して行動をいたしましたが、数量はちぢるん、敵立計画も途中で大幅に変更し、手くて行動を守りました。どの結果毎日同じ予算を立てて「食べる量」を、ひどくもれぬをうけたのです。完全に食糧券の失敗であった。

食糧の国内調達場所は、海賊場における現地、輸送物にもなる点や、多く多目的方がいい、しかし今回の手ては飛行機使用の場合は、荷物の重量という問題もかかるので、堅苦しい飛行機の利用が望ましい。手てを越以上に重量と疲労の為、船外を船内に多くはいり、国内を除くと、食糧調達は、アルトアリソン搭載で全部行きつけ、ここで市場があり、大抵のものは日本と同じ価段で輸入可能だったが、パン類は少なくて高価だった。使用しなかった。

- 個々の食品について長が手てを点をあげてみる
- 米……日本より少し安いが、箱着性は乏しい、炊きあがると黒茶色になるものもある。味は悪くない。
 - 肉魚……ベースキャンプで好ニクトリが、ときに見に入る程度、魚は3~4日は一度
 - 野菜……あまり安くなく質もそれ程良くないし、アルトスリンセサの市場では種類も豊富でなかったのは意外であった。
即席食品……一ヶ所に定住することが少なかったため、日々にとてては非常に簡易食品……有効だ、た、が中には案内人等の口に合わないものもかねりあったことは、注意しなくてはならない。
 - 調味料……日本製のものを多めに持っていた方がいい。アルトプリントセサでも中日製のショーケを売っていたが、味は良くなかった。手てショーケは贈り物としても利用価値が高い。
 - 嗜好品……緑茶は量が少なかったに二倍持っていた方がいい。コーヒーは、アルトプリントセサでも入手可能であり、案内人、護衛兵が毎食事に飲んだので、予定の三倍うちかくの量に手てしきつた。菓子類は、日本とほぼ同値段であり味も良い。果実類は予想通り豊富で値段も安い。

次に七人（隊員五人、案内人、護衛兵）の三週間分の食糧リストをあげる

A. 口内調達			B. 現地調達		
分類	品 目	数 量	分類	品 目	数 量
主 食 品	ラーメン カンパン	20個 10袋	米		80kg
即席 食 品	カレーの素 ハヤシの素 五目寿司の素 チャーハンの素	10個 8個 3個 4個	野 菜	玉ねぎ ジャガイモ ニンジン パパイヤ トマト バナナ カボチャ	50個 80個 20個 ----- ----- 5房 -----
乾燥 食 品	わかめ 乾ドウブ マカロニ お茶漬けのり ふりかけ 即席みそ汁 即席豆いも(の)	10束 10個 2袋 50袋 50袋 20袋 20袋	その 他	鯖 詰 鯵魚 にわとり 干 米	40個 5尾 3羽 -----
簡易 食 品	煮り物 梅 干 個 蒸 味付海苔 年 詰	20袋 5袋 10袋 1袋 20缶	嗜 好 品(調査用も含む)	タバコ カニタバコ 中華酒 ヤシ酒 コーヒー 砂糖 菓子類	1,000本 10袋 10缶 ワル 3ビン 2kg 5袋
調 味 料	ショウエ ソース 砂 糖 塩 こしょう わさび ケチャップ ミ ン 油 化學調味料	10瓶 2瓶 500g 500g 1瓶 1缶 2kg 2缶 3缶			
嗜 好 品	緑 茶 紅 茶 コーヒ 粉末ジュース 即席シリコ 菓子類 スキムミルク 氷砂糖	800g 1缶 1瓶 5袋 2袋 10袋 1缶 4袋			

パラワン医療報告

鈴木 光

用を用ひて、
シテ量額熱
ヒキの解剖
ノノ合併症別
レ場に鎮痛
たは葉の
を葉の
感大絶
そでモ系
き地で器
葉現し化
予防、梁消
アバ止め
リれば、膿割
ラすに化養
マ用他の業
ズ服の合葉
先錠量場剤
ら2るの水
か過す傷淨
と人用外
こい使、剤
うは間で患
いれ月い防
こヶ次、
熱帶、加
りへし生物
115意切

化膿止め葉ヒクロム液、イバラクド、オキシドをのどに含め、喀出する。また、マニカルなビタミンA、D、E、Kを用いて、皮膚の傷害を防ぐ。また、マニカルなビタミンA、D、E、Kを用いて、皮膚の傷害を防ぐ。

消化器系の薬とし、消化剤、胃薬、整腸剤、を用意する。消化剤、胃薬等ほとんど使用せず、一箇多く便ったのは整腸剤であつた。メキウホも精神的な疲労から胃腸障害をみる事が多く、持参の薬が利かず購入のものもある。(Poldemycin made in U.S.A.)現地への使用なし。

鎮痛解熱剤には、一種だけ服用すると副作用があるため、数種併用する。特に頭痛のためには時折使用した。最後の方では腹痛、頭痛のためには時折使用した。特に調査期間の最後の方でも又増量して使用した。特に歩行不能になつた時も腰痛を伴つた場合には、患者が多くて、痛みのみのため下痢が多かった。ソクランは、ソクランを1錠とエキスを1錠とし、それを1日2回服用する。

、抗生物質として、アイロタイシン、タブニン、レグマイシン、ニューシリンを用意した。虫にさされたり、外傷の場合などに、化膿し始めると、虫を吸い止むか。虫を吸い止むか。虫を吸い止むか。

11. 防虫剤は多くは蚊よけの意味であります。しかし、2~3回は失ひますのであるが、現地の人には「ペラン、モスパーなど」と名づけられていました。

度煮沸し、外側に水を充満させた。この水を吸収した後、内側の水を吸収する。この操作を繰り返す。この操作を繰り返す。

に使用量が多い、他用で多く、生のままに30液を用いて、はたとて、不れまし、スル。バンテイに、水を多くして、はい、タク。

食生活もうまくいかず、ビタミン剤を補給していくに次第に便わなくなり、全部アリナミン100錠位しか使わなかった。他は現地人に与えたりしてゼンソクで悩む1人のバタク族がいて、その治療にもこれを用ひたが、幸いこれか効かってしまった。

その他に、ハーブ剤・カゼ葉・逆性石けん液などを用意したが使用することなく終った。

全体的に総括として、先づ、持つて行った薬の量が多かった。どの程度必要なのか、事前調査を十分にする必要がある様に思えた。又、薬の種類も、少し多すぎる様に思えた。もうすこし整理しても良かつたと思う。又、薬品使用の際、量、時期など、使用法については十分すぎる程の事前調査の必要性を感じた。今回の場合、医療係が薬品管理や、配布をすべてしたが、これは良かつたと思う。一歩まちがえば一個の生命が消えるかも知れない場合もあるだろうし、そういう重要な役割を、十分な管理なしにあてなうことは非常に危険である。今後、宿舎等においても、医薬品の管理は設備にまかせるのではなく医療係が常時携帯してほしいと思う。

最後になってしまいまして、これらたくさんの薬品は医学部におられるO.Bの寺島・光氏の街紹介で、三共製薬㈱ 横浜出張所、武田薬品工業KKより御援助していただきをもので、又、東地指導は寺島氏より御指導いただけたもので、隊員一同、心から感謝しております。

抗生素質	クロマイ	13	チコーブ入り	
	アイロタイン	9.5 Tab		
	タオシン	30 "		
	レダマイシン	80 "		
	メリアン	12 "		
	エユーリシン	100 "	ペニシリン	
胃腸薬と 整腸剤	タガフレックス	250 Tab		
	三共胃腸薬	80 Pac		
	メキサホルム	180 Tab	強度の下痢止め	
	ビオフェルミン	40 "		
鎮痛剤と 解熱剤	ソクラン	60 Tab	レジラン	30 Tab
	スパリソ	10 Tab	セテス	5 Pac
	ブレラン	10 "		
防虫剤	リペラン(液)	200 ml	モスピラー	1
	" (4ニーフ)	2		
外傷薬	マンモニア水	100 ml		
	ケナコルトA	10	チコーブ入り・ヒフ炎	
	銀ボルム	1		
	オスバン液	100 ml	逆性石けん液	
	エタノール	100 ml		
	ヨードキンキ	50 ml		
	1ベクタン	1	液性包帯	
ハッヤア	ゼニール	2 Pac		
	ルル	50 Tab	Xリラン	1 Pac
カゼ薬	アレルギン	80 Tab	船酔・ヒフ炎	
	ハラグン	150 "	解毒・淨水剤	
	ウルソサン	4 Pac	肝炎	
	グロンサン	100 Tab	"	
	アリナミン	200 Tab	ビオタミン	100 Tab

装備報告 出羽 寛

I 装備リスト

(共同装備)	(数量)	(費用)	(備考)
ハンモック	4		米軍の放出品 第1次の時、購入。ビニールの屋根、カヤ付。
テント(6人用)	1		装備用テント
ラジウス	2		個人より貸与
ハンゴウ	2		個人より貸与
コソフェル	1		個人より貸与
フライパン	1		個人より貸与
食器	12		個人より貸与
包丁	2		個人より貸与
シャモジ	2		個人より貸与
オタマ	2		個人より貸与
茶コシ器	2		個人より貸与
魚焼鍋	1		個人より貸与
布バケツ	2		個人より貸与
ポリタン	4		個人より貸与
シャベル	1		個人より貸与
メタ(10人用)	5	450円	個人より援助
タワシ	4	120円	積水化学より援助
クレンザー	3	300円	Puerto Principeで購入
ビニールシーツ(1m×2m)	2		湯浅電池より援助
細引	5	300円	"
石油	l	500円	"
ローソク	10		"
懐中電灯	5		"
ヘッドランプ	5		"
電池 (単1)	40		"
(単2)	20		"
替電球	10	100円	個人より貸与
大工道具一式	1		個人より貸与
(ハリガネ・タキ・トライバー カナヅチ・ノコギリ)			個人より貸与
目覚時計	1		個人より貸与
輪ゴム	箱	200円	Puerto Principeで購入
マッチ			積水化学より援助
釣道具一式	5	500円	"
セロテープ	10		個人より貸与
ビニールテープ	5		防虫剤
布テープ	2		
カン切	4		
マジックテイント	10	500円	
ベンゼン	2	300円	
乾燥剤	2		

(学術装備)			
捕虫網	3 2 3 3 1	550円	1本購入
"柄	20		
リニアブ	5		
三角管	100		
毒ツボ	8		
三角紙	12		
クダビン	2		
マヨビン	6		
トラップ(小)	2		
(大)	1		
解剖用具一式	1		
ルーペ	1		
カスミ網	2		
果子のあきカン	2		
注射器	6		
バネバカリ	2		
ノギス	1		
巻尺 (50m)	1		
(1.5m)	2		
紙テープ	20		
日付印	1		
スタンプ台	1		
摺状温度計	3		
最高最低温度計	1		
ボリタ	200	500円	
根掘	1	200円	
カキラ	5		
フルム (モノクロ)	80		
(カラー)	20	10000	
テープレコーダー	1		
テープ	20		
ホルマリン	1000cc		
エーテル	100cc		
酢酸	100cc		
アルコール	1000cc	500円	半分購入

（1）輸送について。船、飛行機などと並んで、装備計画を作りあげるまでのとつてについてと輸送との二点について語らひておいた。（第1次パラワン島探検報告書）
その島の運営は、（1）難航にこなした事はないが、何をどの位の費用のかはつきりさせ（使用目的をはつきりさせること）それを十分に使いこなすこと

（2）輸送について。飛行機、船、車などと並べる所と人か運ばなければならぬ所とを分けた考え方にはならないといふことであつた。

今回、荷作りは、ちよつとがいてフタを付け補強したり、リント箱3つと、
キスリング5つで総重量は300kgである。（第1次パラワン島探検報告書）
キスリング4つ（港荷リストは1次のキのを少し変えただけで大して手間
はかかるがつた）又、費用は大体1万5千円位でこの内、フィルム代が
1万円である。考えてみると、ほとんど金がかかっていなかつた。現地でも装
備が不十分であつたとは感じなかつた。1次の時の装備が残つていつたこと
・各カウの物品援助があつたことなどが、金のかからながつた原因の一
つである。物品援助も含めて全体で5万円位の費用となる。とにかく、共
同装備に関してはほとんどクラブにあるもので簡単に合つた。

横浜でラオス号に乗り込んだとすぐ、リント箱は船室にあすかつてから
つた。キスリングローベッドの下にあしこんでおいた。それからは、マニラ
でも、アエルトアリンガサでも装備は詰つた部屋にもちこんだ。マニラで
一泊のホテルであるシェルホーンホテルでは、我々の大好きな荷物を見て
驚いたようであつたが、別にとかめられはしながつた。マニラのホテル
でリント箱一つの半身をソックに移し、リント箱一つをへり、帰りは食料
のリント箱を一つへつたので、帰りはざしきと、民具や標本の入つたり
リント箱一つとわかった。民具や標本が多い場合には、帰りの方が荷が少い場合
もありうるだらう。

マニラ港に上陸する時、荷物代として金をとられたが、これに払わなくて良かつたうし。港がうホテルまで小型トラックを頼み、ホテルが
決するまで数時間、引き回したため、3000円とられた。マニラからの飛
行機では、荷物代として倍以上に3つかけられ、隊長が迷込んでかけ合
つた末、親日家だとアラタベタ氏が現われて、定額に引きもどした。パラ
ワン島についてからは、日本にいる時から連絡を取つていただおかげで、受
けいれ体制がてきついた。町の人々は親切で特に、ホテルの主人はよく助
けてくれた。おかげでスムーズに装備モアエルトアリンガサより70km北
にあるサンラファエル（ベースキャンプ）までシープで運ぶことなかつた。
我々は一切の装備をここにあき、必要なものだけをつて4つの部屋に入
つた。

次に、現地生活の中で装備について見てみよう。我々は、初めハンモ
ックで生活する予定であった。（テントは荷物用）、ところかとの部落で
木の屋を一軒貸してくれたため、ハンモックは必要なくなった。（サンラファ
エルでも同じ）それでも板は木の屋の中でテントをフントンがわりにしたり
した。寝袋は暑すぎた。一番快適なのは、ハンモックをつけて中にニカラフ
をしめてねることである。バタックの高床式の木の屋には蚊はあまりはい
てこないが、それでも一番困るのは蚊である。初めてサンラファエルにどま
った翌朝、ハンモックを使わなかつたものは蚊にさされて顔がでこぼこで
あつた。クソは一人が登山ブツ、他はキヤラバンであった。現地人だけだ
してシャングルの中を歩く、我々も少くない用の時はくつをはくのが面倒にな
つてはだして歩くようになつた。だらう運動ぐつてキ用をだりるようにな
思えるのだが、登山、川渡りの時、るのでキヤラバンが最高のようだ。
それから初めのめくは、たき火を作つた。しかし、どんな木かよく燃え
るのを知らないし、途中で雨が下つて時間がかかるし、石油かチに入り

さえすれば、やはり便利である。他のことで注意すべきものは、木がすぐ手に入らぬ所だった為、ボリタンはほとんど使わず、布バケツでくんできて、消毒して使つた。また、117°Y部落のボロ小屋で、突然、雨がふつてしまた、小屋の中はひどい雨モリで寝ることもできない。ビニールシーツを天井に張つて雨をふせいた事もあった。

全く使わなかつたものは、魚燻網と太工道具位であつて、使う回数の差は五つでも、どこかで必要になつた。つまり、この装備リストが大体、最低必要なものではないかと思う(共同装備)。学術装備は目的によつて、そのつど変るださう(、共同装備もより長期に生活する場合や、高山に登る場合等は変つてくるかも知れない)。しかし、今回の経験をもとに、より便利で軽量のものに改良していくのはいいと思う、そのことにこの報告が少しでも参考になれば幸いである。

- 終 -

學術報告(概略)

I. 民族調査

一合田 淳一

パラワン島はフィリピン共和国西部北緯10° 東経118°付近に位置し、長さ450Km巾は最も広い所で50Km、東北から西南にのびている。面積は1179Km²、山地が多く8つの主要ピークがある。北から Mt. Irian (2169m) Stripe Peak (4860) Cleopatra's Needle (5223) Mt. Stately (3930) Victoria Peak (5499) Mt. Ganting (5860) Mt. Mantalingajan (6839) Escarpado Peak (3491) 資源は水銀、木材、マンガン、クロム等が豊富にあるが開発の歴史は浅い。

気候は東岸と西岸とはその雨量が異り、西岸では1月～4月が乾期、5月～12月が雨期であるが、東岸は乾雨期の差は少く、気温は1年中高く26°C位である。

南部は18世紀までボルネオのサルタンの支配であった。モロ海賊の横行を押さるためにスペインはタイタイに兵営を設けたがモロとの戦いは、それ以後も長く続いた。政府の奨励にもかかわらずルソンやビサヤの人々はモロを恐れて入植しようとしたが、軍政下におがれていたパラワン島が洲に編入されたのは1902年である。現在同島には南部に回教徒のモロ族があり海洋民族としてスル謠島を中心に行進している。中南部西側の山中にはパラワン族が少数民族である。モロ系の混血である。吹き矢をよくする北部にはビサヤ族がいる。ビサヤ諸島に住む海洋民族である。キリスト教を信仰する内地一帯はタガバヌア族がいる。特に中央部に多く、原マレー族に屬し、人口は昭和17年で2万人だった。中央北寄りの山地にバタク族がいる。ネグリトに属するといわれ、黒人矮小民族である。今なお原始採集、狩猟及び焼畑生活を行つてゐる。ドタク語、コヨイ語等を話す。州都はアントンセサで島の行政、商業、交通の中心である。

華僑の商店が多く、タガロク語が共通語となつてゐる人口3万で現・空港・大学・高校・病院・気象観測所、ロータリークラブがあり、水道と電燈は二／一にしかない。他の町は北部のドゴート4400人、タイタイ56人南部のブルーウェーブポイント2千人である。

我々と一緒に住み、生活と共にしながう民族調査を行つたバタク族は現存する東南アジア最後の民族であるネグリート族すと言われる。身長150cm前後であり、色は黒く、髪はちぢれて、頭は丸い。男はGストリングスといふ木の皮のふんじみたんなものつけ、女は腰布をまとうだけである。彼らは山中に竹で簡単に家を作り、雨期には焼畑。その他の時には竹製の弓やわなにより、11のしい、さる、ヘビ、犬とかげ、アルマジロ等をとり、タロイモ、カモ芋の類を採集し、また海にて貝を取つたり、川で魚をつりたりする全くの原始狩猟生活を営んでゐる。その社会的・文化的孤立は我々の想像をつかめほどである。しかし性質はいたって素朴で、純真であり、むしろ、精神病ともいえよう、そのため、13つという他民族との接触をきらつて13傾向があるようだ。

本調査において自分は、第一に彼らの人口・家族数・集落分布・人口移動の歴史等を調べ、概略をつかむと共に、彼らの家族組織・社会組織等を主に調べた。

詳細は別冊の学術報告書を参照されたい。

パラワン島の音楽 一 安藤 崇一

今回の調査ではパラワン島西北部のネグリート族の音楽がどんなものなのか、またそれらが彼ら独自のものなのか、ということを環境・生活と結びつけて観察調査することとする目標とし、調査の結果38曲の採録曲、3点の楽器と、それらに関する資料を得た。報告書にはパラワン島音楽の概観、彼らの生活と密着した病気を治すための唄について、採録曲38曲（同種類のものの16曲を含むため22種類）の採録状況、曲（唄）の意味等、簡単な説明と採譜例、聚落について、音楽・踊りと宗教の関係等のせたつ。なお、ネグリート族独自の音楽は今回の調査の結果では7曲だけしかえられず、ほとんどオタガバヌア族との他からのものであった。

ネグリート族の家屋について 一井堅 邦明一

彼らの家屋に対する態度は兩つをしのげないといふことである。家を建てた場合とか、家の位置については宗教的制約はない。彼らの家は高床式（約1m）であり、家を建てる時くぎなどの代りにラタンといふトウカイ種を組立くらくる。屋根はバンガといふやしの葉で葺いてある。焼畑耕作中の家で1軒に2～3家族住んでりる事が普通である。1家族について1つの炉があり、瓦上にあって、炊事、寝るときの暖房として使われている。1部落に10軒位の家はあるが、焼畑耕作中（7月～10月）は畠に近い所に家建てて住むので空き家とばかりいるのが多い。詳細は別紙報告書を参照して下さい。

II. 生物調査

"自然"について見た事、聞いた事

一出羽 寛一

私達は、20日間、それもパラワン島のほんの一部分を歩いたのみですが、"パラワン島の自然"といったような概観的な事はかく事はできませんが、私達の生活したアエルトアリンシカ（以下PPS）から60～70km北の海岸線と山へ入った所にあるバタク部落付近の自然について書いておきます。

パラワン島は気候的には雨期・乾期の区つきりした所とそうでない所に

今かれます。私達の生活したのは後者の丸の部分で、雨の方は8月でした。現地の人々は、rain-seasonとdry-seasonとはっきり分けて語っていましたから、乾期・雨期がはっきりしていました。相当な違います。

マニラを飛びたった飛行機がパラワン上空にさしかかると、1000m以上の峰々は中腹以上はベックリと厚い雲でおおわれ、「ああ雨期なのかな」と思われるようでした。しかし、パラワン島滞在約1ヶ月のうち、天候を記してある17日間についてみてみると、1日中、晴れていた日が2日間、曇れたり量ったりの日から日間(1日中雲りは1日間)、そして晴、曇、スコールの3つ組み合わざつた日が10日間でした。つまり、5日間に3日位の割合でスコールが降った事になります。雨期といつても毎日雨が少なかったり、また1日中雨ということではなく、一番典型的と思われる8月23日の日記を見ると、「朝は、いつも雨後のようだ。まだ雲が流れ、空気は湿り、草はツユにぬれている。しかし、少しすると湿度はおひやうされ、ギラギラする日光と青空の一日前となる。午後4時頃からモリ初めスコールのきらめく気配。サンラフエルにモドリベンの家から荷物をこび終った途端にものすごい雨。もう薄暗がって暗さよりキ、雨の白いカーテンで前の山々がくくれてしまつた。約1時間後、食後のタバコの時には、窓の下の木たまりがラブリ、虫が鳴いていた。」

この日の雨は、一番強かつた時で、ポツリへ、サーーといちなりきた。普通は小雨が少し3-4日後で止んで小雨でやむ。気温は直射日光の下では40°C近くあつたと思う。しかし、スコールがくると相当涼しくなる。最も気温が下ったのは、8月24日の夜タグナヤ部署に1つた時で21°Cまで下り、相当、寒さを感じた。

パラワン島は、山脈が海へ泡下し、その頂上付近が残ったような細長い島である。ほとんど平地がなく、熱帯雨林におおわれているという事がいく前に本等から得ていた知識であった。実際、歩いた所ではPPS付近と海岸線と沢谷にわずかな平地があるだけで、人間の手を加えた所以外全く森林であつた。ただ、登る予定だったクレオパトラ、ニードル山の山頂付近は、巨木から草原になつてあり。山中に10種類のウツボカズラ、10cm位のサソリがいると聞いた。これは登ったことのある米人から聞いたもので、1500m位の山では頂上まで森林におおわれているだろうと思っていた私達には意外であつた。森林は、人の手の入っていない所では、20mへ80cm位の大木が稍付近に葉を残らし、日光をさえぎつて、その下にきっと低い木があり、下草はほとんどなく、若葉がしかれている。薄暗く、静かだった。下草はないが、ラタン(?)のツルがくらみあつていて、トゲのある木性シダのようだががあり、歩きづらい。煙の跡に出来た二次林や、森林のふち等はバナナを混つた陽樹林で下はそのままのすごいヤブで、下をぐるごとき、乗りこえきともできないような所である。海岸線から1~33kmほど山に入ったバタク部落手では沢谷に、私達には珍しいわからぬような逆さついている。ほとんど川原を歩くため、歩きやすいが、所々、ヤブの中のトンネルみたいな所も通つていった。案内人のBenは、水の多い時は、このあたりまで水がくるのでといって私達の頭の高さ位ある木を示した。

PPSからサンラフエルまでの海岸線はひらけていて、道路を以て水田や煙畑が続き水田はPPS付近のみ?所々ヤシ林があり、人家のまわりにはバナナやパパイヤが茂つていて、途中、大きなバブヤン洞を通つてが両側に森林がうっとうとしてあり、さすがに熱帯の洞といふ感じであった。先こは河谷に近かつたウマンクロードは貝あたらなかつた、きっと河口までいける場所だらう。

森林の中に住む動物はどうであつたかといふと、Benは“この森にはハイラジや大トカゲが住んでゐる。”“奥へ行くと10m位のMaraniergといふ大ヘビがいるときがある、せいぜい1m位のものだと想つた。実際、マニラの博物館に8m位のニシキヘビの標本があるのだが、その頭骨の大きさの大きなMaraniergはニシキヘビとは違うと言つたが、ニシキヘビとは別の大ヘビがいるかどうかはわからぬ。所が我々がつかずえてヘビだけ川原でつかまえた1m位の細いヘビ、2回の計である。ユブラミル子供が、現地人もほとんどへじに食われたりうしく、大きなかべを新しに獲物を聞く時、たまに見る位らしい。

森の中に行くと、朝あたりから鳥の声がする他は實に静かである。時々、ムカデ、コオロギが行きており、森林性のキヨウがとえぐる。バタクの煙草ではリスがよく遊び、一度見るとそれまで。最初に見た動物は、リス、サル、大トカゲ(40cm), カトカゲ、カヌレオ、シマリス、サンラカエル、アランガンコウ等である。次いでバタクの小屋の近くで見つかったノシシの破骨を見たし、サンラカエルの弱虫で人が角を振りなさいといつてバラワントジヤクの農耕を待つて見てくれば、非常にもすらしく、たまに森の奥で見る位うしなっただ、鳥と異常に多くいた。カラス、鶴に、アヒルの一種とミミズクとコウモリがよくかかつた。ワニも少いときで、まだが一夜を見るところなく、跡によるとバタク川の奥に少いいる強う。

毎日へ、オズミのツヅキもかけながら、各部屋からベースキャンプまで往復しながら森に走つていた事は、一日中のえいりと森林の中で生活していくだけという事だ。たゞもうすれば、そつと10mへ向かうか車で現れてくれただろう。しかしこの日間はまたたく間にすぎてしまつた。今度の旅の目的と、初めての経験であり案内人として行動する事の危険とやらぬの行動は全て部屋とその周りの煙草の影響の及ぶ所にかぎつてしまつた。どういつた意味からもフレオバトラニードル巣山が實現できなかつたのを嘆んでしまうなり。それが以上に、特々の植物や動物の生活を大自然の、そこ中の中から、どうやってつかみだしたうまいやり方で、この事が残念に思ひます。

栽培植物について

東南アジアに散在する諸民族のもつ文化はその民族の歴史とその民族の生活様式・言語などからもこれら民族の歴史と一緒に伝承されてゐる。それが更にその決定的なものとして、彼らのもつ食物がある。民族とこれら食物になる植物(栽培植物)とを合わせて研究する学問を民族植物学といふが、現在未だ資料、足もあつて、しかもりと体系化されてゐるす今回の調査でえられた資料からでは手とめると、ラリナにけ替豆、リコグナ、秋葵である。従つて、今回の資料は、バラワント島における栽培植物といふ段階までにとどめて、各々に観察されたことあるえた。

バラワント島ネズミ採集記

僕の目的は、バタク族の部落に於て、家をねまつて、半家、半野性のネズミを見つけ出し、その生態を見ることでした。その結果60.0%のワナをかけ、2種類、4頭のネズミを得る事が出来ました。そのネズミは(Rattus rattus 2頭、Rattus lutreiventris sub-sp. 2頭) 東南アジアに広く生息する種類であることが分かりました。

まず、僕の頭に残つてゐる、大きな魅力の一つは、海岸線から山まで続いている大きな森林であり、その中に住みながら海と現わさなかつた種々の動物である。そして、そこに住むネズミである。ネズミの生態は、必然として未知のままに僕の前に残つてゐる。だがともすると、島で得た魅力よ

一 錦木 光一

一 出羽 寛一

僕の目的は、ハタク族の部落に於て、家をねまつて、半家、半野性のネズミを見つけ出し、その生態を見ることでした。その結果60.0%のワナをかけ、2種類、4頭のネズミを得る事が出来ました。そのネズミは(Rattus rattus 2頭、Rattus lutreiventris sub-sp. 2頭) 東南

アジアに広く生息する種類であることが分かりました。

まず、僕の頭に残つてゐる、大きな魅力の一つは、海岸線から山まで続いている大きな森林であり、その中に住みながら海と現わさなかつた種々の動物である。そして、そこに住むネズミである。ネズミの生態は、必然として未知のままに僕の前に残つてゐる。だがともすると、島で得た魅力よ

II. 宇家川調査隊一般報告

序

——名和裕美

最初の民族・社会調査であるが、これは37年から39年までの3ヶ年にわたり中止となつた。立命館大學探検部によつて詳しい報告がなされ、私達の調査の必要性はほぼ無用に等しいことがわかつた。この方面では小林君が林業に関する調査を行つただけであつた。

水質調査は、きれいな川の水質調査として全く興味のある調査であり、都市、昼夜、季節、天候、しかしながら、自然の川で、公害に犯された。水質調査は季節による一回のみ採水しか不可能であるが、このため、得られたデータは確定的なものではないのか残念であるが、一資料として提出したいと想つ。アーヴィング

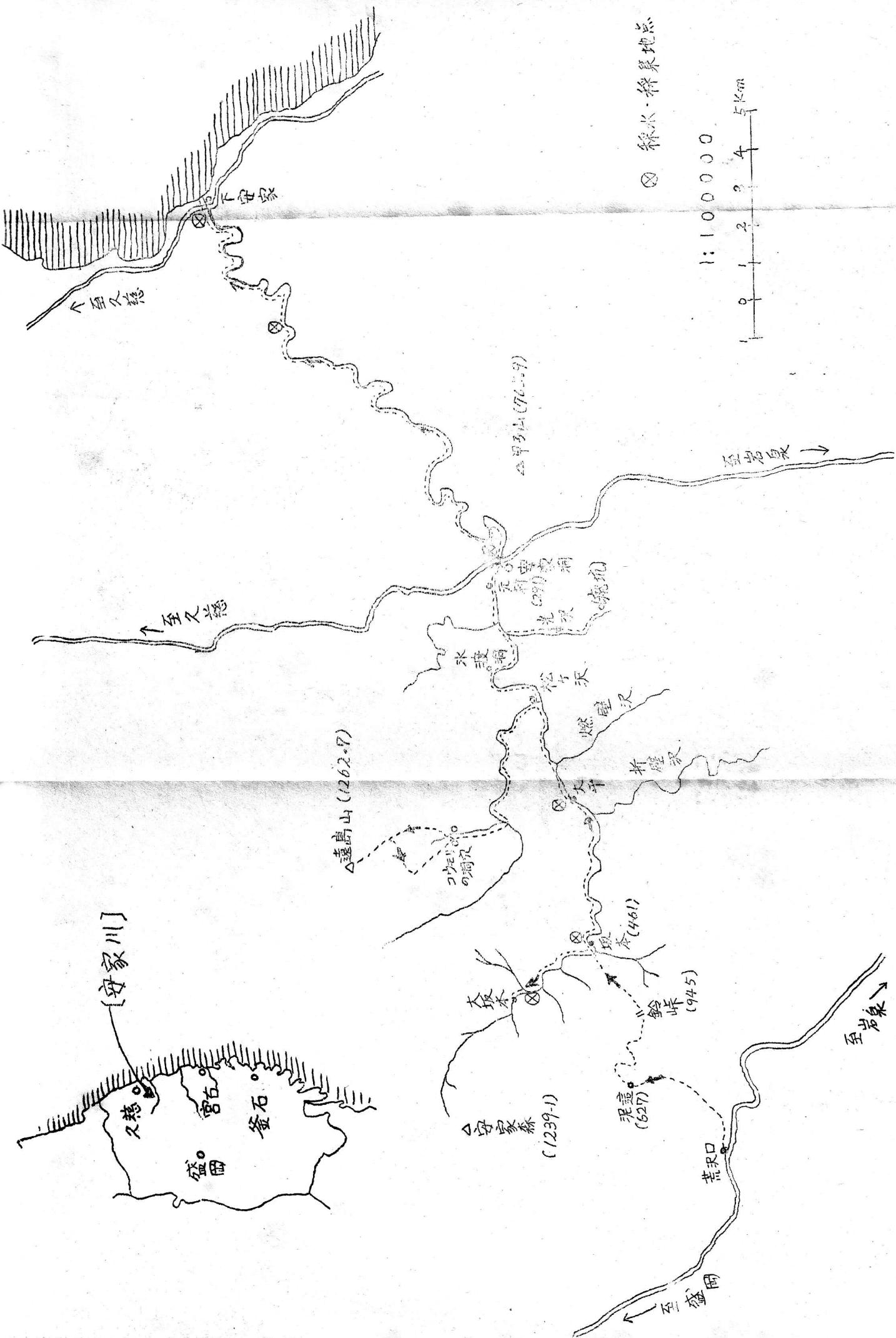
ケイビングに日本最長場としており、私はケイビングを行なつた。詳しい概略は及立横浜曰聖駿で、最初の知識で非常な弱さがあった。次に洞穴に奥する私達の前も、ての知識で、非常に弱いが、それが全く初めてで、その目的を果たすことができた。

このことは以後のケイビングに充分な礎となると考えるからである。一口に云って、鐘乳洞探検ほど、身近に、肌で探検興味を感じるものはないと思つ。一步奥はすべて unknown の地域であり、adventure, investigation の要素は充分である。

私達の 直は学術調査においても、Cavingにおいても充分なものとは云えない。しかし、この探査で得たものをこれから探検部の発展に役立つ様、私達は報告をしたいと思っている。

1. 隊組織。

名和 裕美	化学3年	隊長	水質調査担当
大江 達彦	生物3年	副隊長	浮遊生物調査担当
小林 恵二	地理3年		地理調査担当
峰岸 常之	化学3年		水質調査担当
新井 静男	文科1年	庶務	
大橋 正敏	商学部1年	歩外・医療	
藤本 隆久	商学部1年	食料・写真	
藤山正二郎	文科1年 (学年は当時のまま)	会計・葉巻	



2. 日程(行動記録)

— 新井 静男 —

8月2日(火)	10:30 全員部室集合 13:00 解散 21:00 全員上野駅14番ホーム集合 23:01 小林着 23:05 急行「北上」で出発 菅田、高松、遠ト、津瀬 名和氏の妹の谷氏見送る	(8月4日) 13:45 鈴峰発 14:10 小休止(20発) 35 小休止(45発) 15:10 小休止(20発) 40 小休止(50発) 16:05 坂本分校着 名和・大江・峰岸・新井・大橋 水質調査・ケイソウ採集に出发 小林・藤山・坂本残留、食当 术、採集隊帰着
8月3日(水)	0:20 全員就寝 7:00 ク起床〔井・太橋etc〕 パッキンタマリ直し(新 盛岡着) 8:25 朝食(於駅舎下食堂) 9:15 小林・大橋・藤山野菜販賣出し買 名和・大江・峰岸・学術器具販賣 10:45 全員帰駅、駅前集合 盛岡発 12:55 露宮内着(13:00発) 15:35 荒沢口着、野菜分担 16:00 ク発 30 小休止(40発) 17:25 露宮地着(泥道) 露營、食事準備 19:45 夕食、(食當)峰岸・藤本 20:45 デザート(パイナップル) 21:30 就寝	18:50 19:20 21:30
8月4日(木)	4:00 食當起床 5:30 全員 ク 6:20 朝食 8:10 露宮地発(泥道) 40 小休止(50発) 9:10 小休止(25発) (橙色の帽子の人に出合う) 40 小休止(55発)、水場 10:15 水場着 荷物を半分にして鉢込み (小林・藤山残留) 30 鈴峰着 45 名和・大江・新井 return 11:00 残留地着 20 ク発 35 全員鈴峰着 12:00 中食	8月5日(金) 4:45 食當起床 6:00 全員 ク (気温15℃) 45 朝食 8:15 坂本分校出発 35 小休止(45発) 9:07 小休止(45発) 10:15 水質調査・ケイソウ採集 (気温24.5℃、水温18℃) 50 発 11:00 大休止 15 中食 14:18 出発 50 小休止(15:00発) 15:20 小休止(30発) 50 小休止(16:20発) 16:30 松ヶ沢分校着 露營準備 19:00 夕食 22:00 就寝
8月6日(土)		8月6日(土) 4:15 食當起床 5:00 全員 ク 30 朝食 6:40 露營で遠鳥山へ出発 遠鳥山着 洞穴入洞 昼食 登頂開始 頂上着 下山開始

(8月6日)	18:15 小林・藤山・藤本帰着 50 大江・名和着 19:10 大橋・峰岸着 30 夕食 22:00 就寝	(8月9日) 7:00 全員起床 40 朝食 9:30 名和・小林・新井・藤山・大橋・藤本 水渡洞入、 大江・峰岸・大坂本へ採集に 50 水渡洞着 10:00 ケーピング開始 11:30 プール着、ボートで奥を調査 13:00 最深地発 14:10 入口着 15:40 安家中学校着 20:45 夕食 22:30 就寝
8月7日(日)	4:50 食当起床 6:00 全員 30 朝食 8:00 名和・藤山以外の全員吐氣 月夜ダケにあたる。 12:00 元村の医師到着診察 大橋以外回復 19:00 夕食 21:00 就寝	
8月8日(月)	4:30 食当起床 5:30 全員 7:15 水渡洞穴入出発(大橋残) 30 着 40 名和・新井・藤山組、大江・小林・ 藤本組に分け探検開始 峰岸、入口に残留。 11:00 名和組帰着 45 大江組 12:20 全員露營地(松沢中学校)着 45 昼食 13:10 出発準備開始 14:25 松沢出発 45 水渡洞着小休止(55発) 15:35 安家中学校着 16:25 案 水渡洞入 17:00 水渡洞着(全員) 20 全員ケーピング 19:50 最深地のプールに到着 20:15 名和・大江ゴムボートでプール探検 30 着 出発地帰着不明 のゴーという音は滝と判明。 45 ゴムボートを残し全員引き上げ開始 21:30 大木一郎着 40 洞穴入口帰着 22:20 安家中学校着 23:45 夕食 0:30 就寝	8月10日(水) 5:30 食当起床 6:45 全員 7:25 朝食 9:00 光沢入出発 14:10 安家中学校着 15:10 昼食 16:45 安家洞入(小林残、役場入) 17:00 入洞 30 非公開洞入口着 21:45 安家洞最深部着 22:15 発 2:00 入口着 35 夕食 55 就寝
8月9日(火)	6:20 食当起床	8月11日(木) 6:00 食当起床 7:00 全員 8:00 朝食 15: 小林・大江帰る 11:30 昼食 13:00 安家中学校発 15:35 新井・藤山・藤本・大橋・下安家着 17:00 名和・峰岸着(安家川採水のため廻れる) 19:00 夕食 21:30 就寝
		8月12日(金) 7:00 起床 8:30 朝食 9:30 水泳 12:45 下安家にて解散

4. 会計報告

— 藤山正二郎

[団体収支] <収入> 食料・装備費 (4000×8) 32,000

予備費	(200 × 8)	1,600
-----	-----------	-------

収入計	33,600
-----	--------

<支出>	食料費	13,000
------	-----	--------

装備費	11,100
-----	--------

写真費	2,000
-----	-------

支出計	26,100
-----	--------

<差引>	収入	33,600
------	----	--------

支出	26,100
----	--------

差引残高	7,500 (円)
------	-----------

[個人消費] 団体消費 4,200. ※この外、個人装備・雑費などに

交通費 4,300. 一万円近くにはなった

* 金を一部、ぼくの都合で他人にまかせたり、領収書をもらわなかつたりしたため、収支がはっきりしなかつた。

5. 食料報告

— 大橋正敏

まず献立から、今日は朝食は菓子。さりしたものにしようと思ったので、種類は違うが、みそ汁、つけ物、フリカケ、それにカンヅメ 1~2つ、が通常であり、この範囲で3種類の献立をたてたのであるが、どうも毎日同じような感じの朝食になってしまって好評ではなかった。朝食は一日の活動の源であるから、もっと変化をもたせて食の進むようわざわざに注意せねばならぬ。昼食は手軽なものをと、パン・ラーメン・焼ソバなどを中心に献立をたてたのであるが、不満がなかつたところを見ると好評だ、たのでもある。ただ、マーガリン、ジャムのようなもの、紅茶・コーヒーのようなものは、多くの種類をもつていて食事に変化を持たせろ方がよかつた。夕食につづいて献立をたてたつもりである。栄養価の高いものを存分にとり入れたつもり。それだけに食欲も夕食が一番進んだよう。

以上が朝食、昼食、夕食についての日々の報告であるが、全体的にいうと、2週間という長期間のために、肉類を攝取することができます、もっぱら野菜類が中心であった。肉類といえば、せいぜい、ソーセージ、ハム、方方面面いろいろであり、いろいろ考えた末、結論、ハム、ソーセージを多

物を持っていったのであるが、皆しまいにはあきてしまつてこれは失敗であった。また野菜類の方にしても、料理しやすく、アッサリしておいしく、食欲のない時など最適と思われるが、これ等ばかりでは余り熱量にならぬいし、とにかく重く、非常に力さばったのには困つた。これは現地で野菜が手に入るかどうか不明であるので、盛岡で2週間分を購入して全員で運んだのであるが、これから野菜を持てていく時には重量を考えなくてはいかんと結論した次第。それから、これ等の中には、いたみやすいものが多く、ちょっとぶつけると、そこがブチで腐つてしまい、すぐに料理せねばならなくなつたものが多かつたが、以後これ等の運搬に注意するところも1、いたみやすいものは持てていかない方がよい。

以上が今回の食料報告であるが、まとめると、ごくありふれたことになるのであるが、まず、食事に変化をもたらすこと、アッサリしたものと、カロリーの高いものをうまく組合せること、野菜類とともに肉類の攝取注意を払うこと、食料の保存に関しても、と注意を払うこと、など今後注意すべき事と思われた。

最後に、現地の食べられるか、食べられないかわからないものを、やたら食べることは、まかりまちがうと中毒する危険があるのでやめるべきであった。

食 料 リ ス ト

米 (朝 1合) 夜 1.5合)	11回×8人	22升	ジャム マヨネーズ コンソメスープ ミソ ハイミート ショウ油 ソース エバニヤ コショウ 砂糖	4個 2本 1袋 3kg 1袋 5合 1瓶 1kg 1瓶 2kg
フランスパン (0.5個)	5回×8人	20個		
ラーメン (一袋)	4回×8人	32袋		
焼パン (一袋)	2回×8人	16袋		
ジャガイモ 玉ねぎ ニンジン キャベツ キューリ ナース ピーマン タクアン フクジン漬 わかめ 漬物各種 ぶりかけ しいたけ フ	4kg 4kg 37個 20個 2本 6個 8本 15本 20個 10袋 2袋 8袋 18袋 27袋 2袋 4袋 12袋 6個 30本 30人分			
高野ドウフ ハム ソーセージ カレールー				

6. 安家隊裝備報告

— 藤山正二郎 —

I. 裝備リスト

(持參個數) (使用度) (備考)

(共同裝備)					
炊事用具一式	8人分				
ポリタン (スル)	8	大	大	大	
石油用ポリタン (ヨリ)	2	小	大	無	
ポリバケツ	1	大	大	無	
ナタ	1	大	大	無	
カマ	1	大	大	無	
ラジウス	3	小	大	無	
メタ	大2	大	大	無	2l 現地購入
石油	12l	大	大	無	
マッサ	大箱2	大	大	無	
トランシーバー	1組	大	大	無	日立より貸与
テント一式	4人用と5-6人用	大	大	大	
カメラ	2	中	中	中	部員より貸与
釣道具	1組	中	中	中	
水中メガネ	3	中	中	中	
薬品一式	1	中	中	中	
テープ (セロファン ビニール・布)	1カンづつ	中	中	中	援助品 積水化学より援助
筆記用具	1	中	中	中	
		小	小	小	
(学術裝備)					
ポリビン 1l	5				
100ml	6				
PH比色計	30				
プランクトンネット (直径 25cm)	1	大	大	大	探水用
温度計 (アルコール)	1				
ブラシ	2				
ホルマリン	1				
(派宍裝備)					
補助ザイル (30m)	1				
ヘルメット	5				
ヘッドライト	5				
蓄電池	70				
替電球	5				
ローンク	20				
マーキング用紙テープ	10				
フラッシュランプ	40				
フィルム カラー	2本				
白 黒	10本				
巻尺 (50m)	1				
測図用方眼紙	1冊				
磁石	2				

探水用
浮游生物採集用
(化学部より貸与)

(援助品
(+20 伝 現地購入)

測定用細引 (10m)	5	大	
ゴムボート (2人乗り)	1	大	
筆記用具	1	大	

Ⅱ. 反省

今回の探査で教訓として得られたことは洞窟に関する幾つかの点、たとえば、たとえ水没しても道具を手に持てぬいては洞窟が危険かでない、いろいろと装備の点でも未だ足りること多かった。しかし、安全に洞窟に入るために、比較的簡単な装備をすんだ。比較からさうに経験してみるとどうにせれば、ロッド、ドライミストリの操作に力覚を失ふ事無くも運営してシリカからおはねば取れやすくなる。次に洞窟の本筋について述べよう。

（一般設備）

ラジウス ----- さつまつていらぐに成つたが、その要は洞窟内に移った。しかし少しがれ悪またの支障はなかつた。掃除等は必ず機械の運営はまきていくべし。

トランシーバー ----- 洞道のよう山地で洞窟内では全く役には立たない。

事前にその構配について諮詢して貰くことが必要。

ゴムボート ----- 洞窟内での運営途中で破損したらしく、水にうかべるとぬれてしまつた。一たん、修理用具はもつていったが効果はさかなかった。

水中メガネ ----- 三つのうち二つがラスがわれていた、われやすいものへの注意がたりない。

電池 (漏電保護) ----- 漏電へよく入ったため消費度が大きかった。

ザイル30m ----- 合図は横穴だ、たためザイルの必要は余りなかった。洞内の池をゴムボートで渡った時に使っただけ。

ヘルメット ----- これは絶対必要。落盤の危険は全どないが、頭を天井にぶつけケガをすることがある。

ヘッドランプ ----- 洞内で岩にぶつけたり、電池ケースを落としたりしてしばしば故障する。貴重品として注意深く扱つべし。

ローソク ----- 洞内は瓦がよいのが普通だから役に立つ。移動性に欠けるがヘッドランプの電池節約のためや、ヘッドランプのように一奥を照らすのとは違い、全体を照らすために便利。

マーキング用紙 ----- 複雑にいりこんでいる所では必要ないが、もし使用する場合、出洞する時とりさつていくこと。

磁石 ----- 安物では狂いやすい。時々真検すること。

（洞内撮影について）

遠距離(2m以上)で撮影する場合、シャッターを開いたままフラッシュを数発（場所を変えて）たくとよくうつる。

近距離の場合でも強力なフラッシュを使用した方がよい。

しが わたみ 7. 氷渡洞窟を探検して

— 大橋 正敏 —

※ 岩手県安家川流域の松ヶ沢と元村の中間にあり、主洞の長さは約2kmで規模は中くらい、まだ新しく、地下水が盛んに流れている。

林道に面した洞口に立つと、ヒンヤリとして、あたり一面霧がたちこめていた。ヘルメット・キャップライト・腰中電燈・手袋・ローソク等の装備を点検しながら、いよいよ中へ入る。始めの内は大人が十分たって歩けるくらいの所が約2m~30cmほど続いていた。突然、道がなくなり、左上に人の胸がやっと入るくらいの穴があった。最初の難所である。上半身は巣に入れたが、腰につけた蓄油ケースがひかかって下半身はどうしても岩の穴から抜けない。無理に通そうと腰を動かしているうちにケースを岩にぶつけ、キャップライトが消えてしまった。一方では足の下の足場がわかれず、むやみに足をすくへらす。こんなことをしながらやっとその穴を抜けた。すると目の前に約70~80cm、高さ約20mの大殿堂みたいな所があらわれた。この洞窟では一番広い所であった。ちょうど腹がすいたので食事をすることにした。アンパン一個がヒラテキのように思えた。

食後、荷物の一部をそこに残して、いよいよ奥に入る。この殿堂の入口と同じような穴が下に続いている。これがまた一苦労だった。下りのため頭から入るわけにはいかない。足からである。足にライトはないし、自らもしない。足さぐりでおりる他はない。くるぶし、ひざなどをあちこちの岩にぶつけながらおりる。しかし、どうもうまくいかない。最後にはお尻のところも、上がることできなくなってしまった。やたら体を動かす。それから、またライトが消えてしまつた。道をうのびたが、手足がうまくつかず、もどかしいばかりだ。仕方なく、後方からライトで照してそちらで活動開始……や、とのことで穴をぬけることができた。

下の道に出ると、そこからは中腰で進める高さでずっと続いている。そして、始めて鐘乳石があちこちにあらわれてきた。地下水によて溶かされ、ちょうどトンネルのようになつた穴、地震か何かでくずれた大きな岩を越え、あるいはくぐって200mぐらい進むと、突然、目の前に直径約50cm、高さ3~4mの真白な石柱がさん然と輝いていた。今までの鐘乳石が貧弱だったせいもあるが、それはそこらにあるものとは違ひ見事な石柱で、ギリシャ神殿の柱をまのあたりに見ているようであつた。しかし、私たちは見物にきたのではない、探検にきたのである。奥へ進まなければならない。

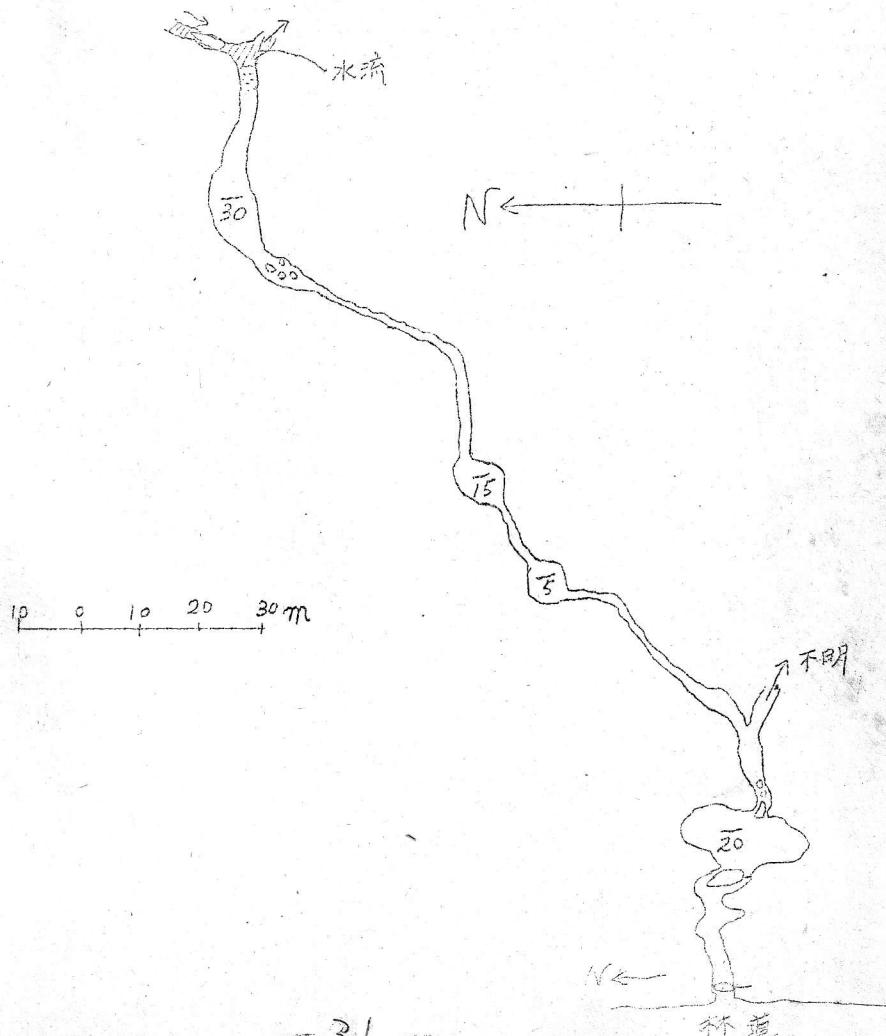
中腰の状態で、または這いながら200m程進むと、ゴーという音が大きくなりってきた。何だろう? すこし不安であった。滝ではないのかとそんなことを考えながらしばらく進むと、道は水にもぐっていた。そこからは水が奥へずっと続いている。そこで、もっててきたゴムボートをひろげる。交代で、まっしろな息をはきながらボートをふくらます。しまいには頭がいたくなりフラフラしてきた。それでもやつとのことでボートを作り、綱をつけて奥へ進む。

5~6m進むと流れは左右に分かれていった。どうやら水は左から流れ、水たまりとなって右へ流れているようであった。右はすぐ小さな穴に流れこんで、それ以上進めなかつたので上流である左に向かった。5~6m進むと、高さ約3mの滝があった。外でみれば何でもないそのに思えるのだ

が、ここで見ると何となくすごい。音のせいだけではないだろう。そこをゴムボートをかついで一気にのぼる。さらに奥へ進もうとボートを浮べたが、その先は穴が小さくなる。て、人間には無理と思われた。それでも少しでも奥へと、ボートが通れなくなるところまで進む。しかしここでまことに、た。これ以上無理だ。そこで記念のフラッシュをたいて、そこを退こうとした時、足下に自分たちのとは違うフラッシュの球が落ちていて、最初で落ちた。ここには誰かかもう来ていたのか、自分たちが最初ではないのか。そう思うとガックリきた。

しかし、今考えてみると、私はここで、少くとも探検的一面である冒険というものを、初めて味わった気がするのである。

永渡洞略図



8. 学術報告

A. 家家の「焼子」の実態

— 小林 廉三

存在条件と概況

北上山地内郭は冷温の顕著なはだしい地域である。北東方面の山背風を裏面から受けたので他の北側は温暖となり、標高すら500mの被覆を受ける。地形的にも広大な平地が少く水田はほんの少なくて大部分は山地とされている。しかし、山中の平地は物産に豊かし、気候が涼暖で冬は雪を鋪するにはほどんど障害を有しない。しかし、このような自然環境に住む民の生活は分化を強め、一部の豪農は山林、原野地、耕地を所有し、命懸けで現その小作人として、生活のほとんどすべての面で豪農の支配を受けている。この地帯一筋が東北地方で最も強力な豪農（豪農地主）が発達し、地解放は在らず、その封建的社會、剥削層が残存しているのである。戦後は小林、株草地、家畜に關して何より生産の手を加えなかつた。焼く残している。

この地区で現在行われている下炭焼（地頭、だんな）はその私有時代の若人から成立した散人の山林（地頭、だんな）はその私有権を、数人の下刈り（木こり）は木こり（農田期に割業として製造するを男がその中心に利用している。「焼子」は以前は、豪農の子弟として製造していった者が多かつたが、近頃は、又は家族づれで年中山中生活をしていた者が多か化したものが多かつた。林業資本が外から進出して来たため、それへの男労働者化したものが多かつた。「焼子」も村に残っている余剰婦人の労働力によるものが多くなった。「焼子」も序々にその性格を変え、兼業が急増し、人数も毎年20%位の割合で減少し、現在、男子195人、女子216人、計411人となる。労賃は男子800円、女子500円（1日）

（ききとり …… 木村義直前安家事務所長）

「焼子」の生活

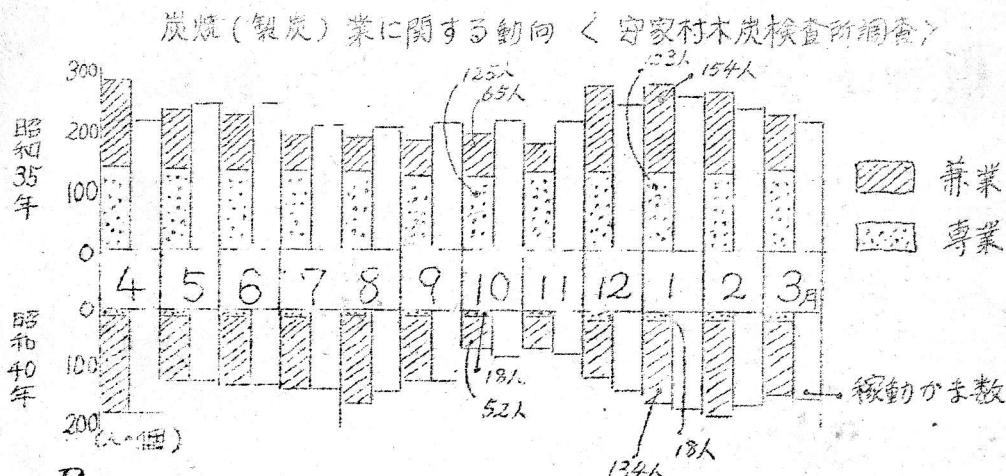
▼ “だんな” 小林口氏（横笛町顧問）からのききとり

焼子は2人、1つのかまの一回製炭につき、四～五昼夜焼く。二人で原木、炭の出し入れを一日がかりでやる。50俵やく、（1俵15kg 400円）2.5万の製炭。かまは原木採集地の近くに作り、その大小は原木の量により決まる。かまは男子の場合、殆んど1人1機の割合で、女子は手伝である。

▼ “焼子” 林下さん（婦人）からのききとり

6人家族で、夫は夏季、山林の造林や併に就業、冬は炭を焼く。事業で田畠はない。4時起きで、労働時間は朝8時から夕方の6時30分まで、それ以上になる時がしばしばである。休暇は盆、正月位で、日曜日は庚辰祭なし。雨が降れば、袋づめ、炭切り仕事。山元（山中）で働いている人（村から3km山中）は、全て人力にたどる。彼女は一人で2つのかまを管理している。

テレビ、新聞はない。



B. 水質調査の概略

化学実験

—— 峰 岸 常 之

過去の学術調査隊のやり残してきた安家川流域水質化学分析に当り、採水地点は安家川内6地点、安家洞内2地点である。(別図)

現地測定は、気温、水温、PH、透明度、における各物理的性質項目について行なった。採水はポリビン(1ℓ)に封入し、帰路後本学実験室にて室内分析にかけた。室内分析項は次の六項目についてである。

- (1). All-Alkali degree.
- (2). Magnesium ion
- (3). Calcium ion
- (4). Chlorine ion
- (5). Chemical-Oxygen-Demand
- (6). Arkyl-Benzene-Sulfonate

結果は現在検討中であり、後に、他の調査結果と共に学術報告する予定である。

なお今回の水質分析にあたり、横浜国立大教育学部教授武藤寛、本学分析化学生教室高橋久子、化学研究部伊藤明、各氏の御助力を承った。

生物実験

—— 大 江 達 彦

安家川の水質汚濁度を生物学的に判定し、前述の水質化学分析の結果と比較する。

今回の調査では、渡辺仁治氏の「北海道常呂川の水質汚濁に対する珪藻の種類数に基づく生物指標」(日本生態学会誌12, 1962/216~222)を参考にして、採集物の個体数を考えに入れないと、或特定の生物群の種類数の比、又は和を水質判定の指標とした。しかしこの場合特定の生物群に生態学的意義があるとしても種類数の比又は和に値する絶対的な意義は認めにく

又、現在の段階では危険がある。でもこれが化学的分析の結果と何うかの関連性をもつ普遍性を有するものであるならば水質汚濁の生物学的判定が成立するであろう。

III 神津島合宿について 遠藤純一郎

私達は伊豆七島の一つである神津島において、昨年8月25日より一週間の合宿を行つた。本合宿は、その目的、内容において探検部と初の2ヶ月試みであった。つまり、今年三月の台湾蘭嶼調査を目標として昨年5月以来その準備を進めてきたことは、同紙に記載されているのでおわかりと思いますが、その一環としての強化合宿という目的だったのです。

このように、本合宿の目的は、主に蘭嶼調査に備えての体力面、技術面の強化であり、並びに隊員の結束を強化することであった。一方、探検部員としての根本的態度、即ち自然への探求心・觀察心に基く調査活動に対する基礎的素養を身につけたいという目的もあった。それ故、次に列記するような目的を実行したわけであるが、それぞれ簡単に反響してみよう。

(I) 蘭嶼調査に対し次のことを考え方話し合う。

1. 本調査の意義 — パラワニ島調査に続く海外調査としての意義と、隊員の情熱は充分高まつたと思うが、調査に蘭嶼する意義に関しては、過去の調査状態がわからぬので不完全であった。
2. 蘭嶼に関する知識を深くする。 — 文獻資料その他不足でほとんど進展しがた。
3. 各自の研究テーマを蘭嶼を中心に展開する。 — 各自の興味ある分野からのアプローチをとし、テーマを設定したに留まった。
4. 調査方法について — 上記の如くススムから、より調査方法も確立せねばかつた。

(II) 体力的技術的訓練を行う。

1. 天上山登山 — 体力訓練と同時に、火山島の様子を把握できた。
2. 島内半周 — 実際の島の状態と地図との状態との関連を理解するに役立つた。
3. ザイル訓練 — ほんの少し行つただけだが、ザイルに翻れたことは良かった。
4. ゴムボート訓練 — 全員がボートをこげきようになつた。
5. 撮影 — 時間の関係で不十分であった。
6. スケッチの書き方 — 3、4枚にすぎなかつたわけだが、スケッチの重要性を感じた。
7. 野営をつける習慣を身につける。 — 徹底されなかつたことは残念である。
8. 料理技術 — 全員申し分なかつた。

(III) 基礎的な探査精神を身につける。

1. 調査活動にとつて必要な規則正しい生活をする。 — 理想的といつてよいほどニコニコ目的は達成された。
2. 团体生活に慣れる。 — 楽しいぶんりきの申で、結束力がおおいに強まつた。
3. 自然への探求心と觀察心を身につける。 — 結果としては判断できかねるが、かなり注意した。

(IV) 学習会・講習会を行う。

1. 天気図のとり方 — 每日実行し、ある程度まで成果があがつた。
2. 中国語の学習 — 主に日常会話を学び、中国語になれることができた。

3. 「探検部における自分」。丁探検と蘭嶼調査をテーマに討論。
 一 皆問題にがつこつ悩んでいたが、お互いが理解できた。
4. 探検観について討論。一主ト三年生を中心に話し合ったが、決論は出せなかった。

以上のように総合してみると、一週間の短い期間の中で、蘭嶼本調査に対する直接的な効果はあまり上らなかったが、周辺的な効果、即ち探検部員としてのオールラウンドな基礎的実力は相当ついたようと思える。

蘭嶼調査に対する直接的効果、即ち国的目的の達成は、12月の伊勢原合宿において最もものとせたと言えるだろう。伊勢原合宿はこの事を目的としたのである。

それでは今回の合宿を行って、私なりに感じたことを述べた。まず強化合宿でありますように、二つの合宿の一つの目的が蘭嶼調査であり、意義があり、実際わざとしの基礎的な素養を身につけると、もう一つの目的では、予想以上の効果があった。二つともに、蘭嶼調査隊は二回の合宿によって、その訓練、準備を行って来た。しかし、ここで考えるに、本来これなりに、何が問題ではなかつたのか? 今回の強化合宿というよりを一つの隊だけで独自にやっていく事は望ましくないと私は思う。

ともあれ、探検に対する基礎的な体力・技術・知識・結団力等々が我部の日常生活において、充分指導・勉強されていなかつた事については、大いに反省すべき点であろう。

併しにも、大学生活四年という短い期間の中、探検部員として充分な基本的資格を持つようになるまでには個人の相当な努力と部の前向きの姿勢がなければならぬ事を、私自身今更のように痛感している。

—終—

合宿参加者(学年は当時)

鈴木宏尚(3年)

遠藤紘一郎(3年)

津幡光哉(2年)

成田佳紀(1年)

〈座談会〉 大学祭を省みて

—探検部の展示・スライドについて—

出席者

菅田 弦 文	大下 好 豊 商	ス
遠藤 紘一郎 文	新井 静 敏 文	文 /
大江 達彦 理	大橋 正敏 商	商 /
合田 澄理 商	藤山 正二郎 文	文 /
出羽 審理 商	山本 眞二 商	商 /
安藤 邦明 文	津幡 光哉 商	(司会)
井草		

(学年は座談会当時)

一部長としてー 部長として、十月までには、やりたい事の六割位しかできなかつたが、大学祭は大成功であつたと思う。(遠ド)
一大学祭責任者ー 他の大学、他のクラスとくらべてみても、まあまあの水準までいゝたと思う。(安ド)

司会 まず“初めに、根本的な大学祭の問題・技術的な大学祭の問題・今年度と過去との大学祭を省みての今後の展望、この三つの点から話しがっていきたいと思います。出羽さんどうですか。

出羽 人から見てもらうという点ではすばらしかつたし、実際に見た人もそう言つていた。

菅田 だんだんと探検というものが宣伝されていきつつある。自分でしては都合により準備しているのを見られなかつたので、今までよりさびしかつたが、朝、来てみると展示室が立派になつていておどろいた。それにしても安ド君に感謝する。次に、前の話のとき問題となつた点、つまり学術と興味の点ですが、興味は十分出せ、学術も、まあまあ出す。欲をきつねり、来年学術をもう少し系統立て出すのがいいのじゃないか。

遠ド きれいで見える点に目標をおいたが——途中でくじけそうにた。安ド君がひっぱってくれてやり通す事ができた。

司会 一年生の鶴君はどう思ひますか。

新井 とてもすばらしいと思つた。ただ学外の友から聞くと学術をもっと表面に出したほうがよいと言つていたが、僕はあしろ今年やつたあのようなもので良いと思ひます。

大橋 今年の大学祭では、展示の直前まで準備におわれていた感じで考ふる余裕はなかつた。

山本 他人から“良かった”と聞いて安心した。

大下 スライドが技術面で満足できない所があつたようだ。

井笠 展示はまあまあだと思うが、スライドがちょっと弱かった。

谷田 長期的な展望（来年の台湾調査）を出したのはよかったです。展示の説明の練習をしておいた方が良かった。でも安ド君ごくろうさんでした。

大江 夏の探査の結果を大学祭までにまとめるのは無理だな。ここにも問題があると思う。説明の仕方・人員の配置などもう少し計画的だ。たうちも、とすればしかったと思う。

安ド 何を探検部は訴えたいのかということをスローガンだけでごまかしたような感じがした。“探検とは何か”も訴えられなかった。人に探検部を認識させることにおいては失敗したと思う。また、大学祭に対する部の方針がはっきりしていないかったし、部員も服装不足だった。人によく知らせようとする所に欠けているのがあった。当日になってスライド説明において支障をきたした。

この原因は何であるかというと、計画のまずさ、大学祭に対する安易な考え方、粗雑な原稿・パンフレットなどがあるし、展示の最後の日に向けて探検部に悪い要素がでてきたし、初めに計画を立ててもその場その場で妥協してしまった。このようなことは改めるべきだと思う。

司会 今の中安ド君の言葉は誰にも痛烈にひびいたことだと思います。確かに、安易な妥協的態度があった。形はできただけど、内容がすぐれない。なれど、良い気持は改めた方が良いと思う。

ここで、この問題を深くほり下げる方が実のあるものになると思いますが――

遠山 サークルに入っている事は、サークルをやらないければ生きていけないというような事ではないから、自分からやるというような積極的態度はうすれながらある。つまり部に対する責任感が忘れられやすい。しかし、このようなことではいけない、もっと自分を責任あるものになしてほしい。“探検部はオレがいなければやつていけないので”ということをいつも考えてほしいと思います。

出田 スライド中で、神津島を発表しなかったが、そのようなことは問題があると思うが――

司会 神津島の合宿のスライドはPRの実でも効果がないと思って削った。

谷田 大学祭は成功したと思っても、よく考えてみると、探検部には悪い事がある。こんな実、安ド君など若いし是正してほしい。

司会 一年生の新しい感覚で、その悪い実について言つてもらいたいものだが――

新井 塗装的な面が探検部には見受けられる。

山本 部室がいつも汚い。

藤山 準備が遅すぎたし、展示の前日は徹夜してはならないと思います。疲れを前日まで残し、見る人に対しても失礼だ。それに原稿などは早く書いてしまっておくべきだ。

司会 それはどんな所に原因があると思いますか。

藤山 いい面かもしれないが、部員には主張しすぎる裏、非協力的なものがあると思うし、時間を守らないからだと思います。

出羽 いろいろ悪い点がでてきたが、全体として良か、たということは確信できると思う。

菅田 最近になってわかったことだが、“一人一人が主張しすぎる”ということは悪い面もあるが、良い面が多いと思う。探検部では、各人が探検観をもち、部の活動が自分で運営されるようになってしまった、つまり一匹狼になってしまったらしいということだ。途中でいやになることのないようにしてほしい、専攻と探検とを別のものに考えていいから、同じ尊重するものだと考えてほしい。

遠ド 本当に、僕も、部員各人が探検観をもってほしいと思います。

司会 では次に技術的な問題を、また、その他、来年への展望についてのべてもらいたいのですが…

菅田 来年への展望を今やる必要はないと思う。というのは、大学祭はその年の探査なくしてはありえないからだ。

司会 それでは来年の探査計画、その祭への反映についてのべてくれませんか。

出羽 大学祭は学年のお祭ではない。それをやることによって、何か疾んでくると思う。だから、探検についての講演などをやってもらおうのもいいことだと思うが。

合田 五・六年ぐらいの長期間にわたり系統立てて探査地をさがすことが必要じゃないのかな。

遠ド 部長ということもあって、台湾蘭嶼の方にあまり手がまわらず、説明も自信をもってできなかつた。

菅田 フィリピンの方も、この後、続けるかどうか討論しても良いと思うけど…

司会 もう時間もないようですから、その問題は大きすぎるので次回にまわし、このへんで大学祭の反省会をおわりたいと思います。みなさんありがとうございました。(41年10月12日、102教室にて)

夏期肝采査計画(42年度)

I. 宇治群島學術調査

鹿児島県・枕崎より西方海上100Kmにある無人島。

生物・地形調査と隊員の心理テストを行う

7月23日～8月24日

隊長水下・大橋・成田・今井・加納・山口・東・秋穂・中島・川野

II. 宝島學術調査

鹿児島県・トカラ列島にある人口387人の島。

人文調査を行う

7月19日～8月18日

隊長井壁・安藤・斎藤・長谷川・小酒井・宮守賀・合田

III. 新潟川流域調査

日高山脈から新潟県内を流れ3川。

町内の開拓村落の社会調査と日高山脈の生物調査。

8月1日～23日

隊長出羽・小沢・新井・藤山・丸茂・水尾

■ 探査会—探検部運動史の検討 ■

—理四 岸 常一—

I. 緒言

探査会設立が昭和33年(1958年)であるから、10年に近づくが、その間、探査会学生部が発足し、それはまた、探査部のうちに発展的に解消していく。たゞ、その性格の変化もまた今や検討の必要があると考えられるだろう。探査部なる名称はどうあれ、その実体はいかなる運動を行なっているのか、という客観的把握が本稿の目的である。

このことは、オーニに我々が討論することによつて行なわれねばならない。即ち、その「歴史の検討」はまた「探査精神」などのテーマの継続的問題に密接している。我々が、探査会以来、伝統通り聖職なりを語り合ふことは多少なりとも、完全な対立、即ち歴史形態における理想的形態をさぐる試みに他ならない。これはまた次の世代のための宝鑑はカテゴリーであつたし、そうでなければならぬものである。寧ろ、我々の「現実の」活動はとりもなおさず、探査部運営における土台となることであることを忘却しては無意味であつて、この時点を過ぎて、個性的精神を確立してゆかねばならないが、それがと個人的な行動とは別問題である。部内統一問題においても「独断」をなくし民主的方向をさぐり出すことに日常の運動が展開されねばならない。

以上の論えは、本稿の「検討」なる方法論において重要なオ一段階を形成していることは先に述べたところである。

次に、我々はオニ段階に移行することであり、これは探査部の科学精神と一致するところであつて、つまり以後の探査(探査)活動において問題とするところは、この科学精神に基づくことない、観光旅行的遠征をいましめなければならないと云つことである。

すでにオニ段階で提示された根本は、「未知への挑戦」なる概念のなかに捨象された数々の精神—宿泊、冒険、勇氣 etc.——に依つてゐることであつて、この段階で一致することは恐らく共通なものであるに違ひないし、この根本的欲求を喪失しては、人間の人間である条件を放棄したと考えてよいと思う。

我々の問題とする所は、このオニ段階の根本的欲求が、正しくオニ段階に発現され発展されているかである。オニ段階—即ち科学精神は、オ一段階—即ち未知への欲求による精神の発展であり転化であらねばならない。というのは、そうしたことば、「探査」を単なる「旅行会」の旅行とみなすことに対する捨棄を明確にすることに他ならないからである。

さて、このオニ段階に於ては、隊の活動がそのまま科学精神として現象し、そこには、隊員数の多少によらず、隊員は各草門分科内容に従つて協調編成の一員となることである。云うまでもなく、この理想的形態の確立のためにどれほどの日常活動や努力が費されたかについても、今散々までに客観化するために捨象しよう。

[註] 本稿の方法に於ては、例えは、オニ段階に於ける他の意見があるには違い無いが、各専門分科の制限を撤廃し、隊員が総分野にわたって実践するべきだという意見など、そこにはまたもう一つの客観的検討が成される必要があるということを捨象した。

そうすれば、隊員の現地における活動は、それが前の日常活動の凝縮で、

あるとしてよいのであるが、この客觀化は非常にむずかしい。というのは、そこには、隊員の平均的主觀観に依ってその性格が左右されるという裏で、本稿では、それらの捨象を行なうことによって、さらに下向し、現地における隊の活動の対象化は、「計画書」及び「報告書」に対して~~適当~~であることを認め、その科学性を検討する。

このようにして、「探査会—探査部運動史」の検討は、過去に行なわれた「學術調査」の「計画書」及び「報告書」の検討であることになる。

II. 資料の客觀化

資料—學術調査「計画書」「報告書」—の客觀化は、次の数量化を各項に行なうこととする。

- (A) 調査計画項目数の推移(計画書)
- (B) 調査計画内容数の推移()
- (C) 報告結果項目数の推移(一般報告書)
- (D) 報告結果内容数の推移()
- (E) 計画項目の報告された割合—(A)(C)
- (F) 調査結果報告の學術レベルの推移

[意義]

(A)(B)は調査隊編成当時の組織程度であり、(E)はきちんと報告されたか、(C)(D)(F)は成功の程度である。

[数量化]

(A)(C)の項目数については、自然—人文—社會—医学の各系列に於いて次のような分類を行ない、各項目を一単位とする。

- (1). 自然科学系列—生物、化学(物理を含む)、地学(自然地理)
- (2). 人文科学系列—地理(人文地理)、民俗、歴史。
- (3). 社会科学系列—政治、經濟(産業)、社会。
- (4). 医学系列 -----医学全般。

(B)(D)の内容数については、上記の(1)(2)(3)(4)によるパーセント表示。(E)は(C)/(A)によるパーセント表示。(F)は最も数量化が困難であるが、これについては得実制を採用する。

- (1) 一般報告書はすべて1点を与える。
- (2) 純學術報告書はすべて1点を与える。
- (3) 学生以外の学内及び学外有識者参加に対しては1点を加算する。
- (2) 大学論叢・学生論集・研究会報告・卒論提出分につき、各1点を加算する。

[対象]

「大探査」・「小探査」等、「學術調査」内容をもつ資料に限定する。次のようにナンバー付けをした。

1958 (S. 33)	三宅島湖沼調査	No. 1
1959 (34)	知床半島學術調査	No. 2
1960 (35)	神津島調査	No. 3
1961 (36)	北上川水系調査	No. 4
局 上	那須鏡沼調査	No. 5
1962 (37)	大雪山扇ヶ原調査	No. 6

1963 (S.38)	鶴淵根地内島調査	No. 7
同 上	江川水系調査	No. 8
1964 (S.39)	オーストリア男女群島調査	No. 9
同 上	朝日連峰北部調査	No. 10
同 上	小樽京丸集落調査	No. 11
1965 (S.40)	オーストリア男女群島調査	No. 12
同 上	北海道開拓農民調査	No. 13
同 上	オーストリアフィリピン・パラワン島調査	No. 14

[補記] 上記の数量化においては、学内外学生参加については、文連一自治会の構成サークルとして何ら区別しない（調査会時代も同様とする）。上記の対象に於いては、訓練その他のものは含めない。また、資料紛失のものがあったので、これについては全般の数量化分析は行えないが、わかる所は記した (No.7, No.8)。なお No. 9 は技術訓練的意味をもつものであるが、小調査として、これも含めたことを明記しておく。

III. 資料の分析結果 (データ)

データは、表及び図によって次のようになつた。

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
項目数	3	3	4	4	3	5	3	2	3	3	6	3	4	3

(表A) 調査計画項目数の推移

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
自然	100	100	33	33	100	33	50	100	50	50	33	50	33	33
人文	—	—	—	33	—	33	50	—	50	50	33	50	33	33
社会	—	—	33	—	—	33	—	—	—	—	33	—	33	33
医学	—	—	33	33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(表B) 調査計画内容数の推移 (%)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
項目数	3	3	4	4	0	5	3	2	2	0	6	3	0	0

(表C) 報告結果項目数の推移

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
自然	100	100	33	33	—	33	50	100	25	—	33	50	—	—
人文	—	—	—	33	—	33	50	—	50	—	33	50	—	—
社会	—	—	33	—	—	33	—	—	—	—	33	—	—	—
医学	—	—	33	33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(表D) 報告結果内容数の推移(%)

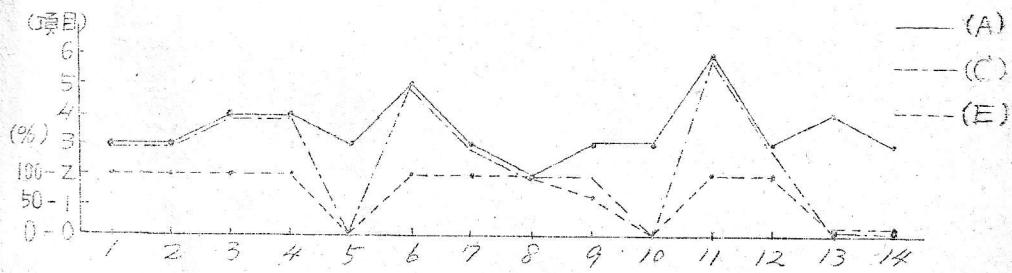
(註) No.14の一般報告書は、計画書にあるパラワン島へ入島できず、ミンダナオ島リーンガにおける調査結果が報告されているので計画は達成されていないとした。

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
割合	100	100	100	100	—	100	100	100	67	—	100	100	—	—

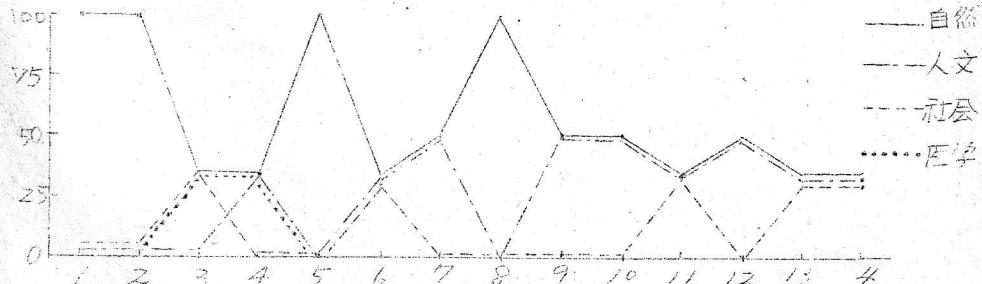
(表E) 計画項目の報告された割合(%)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
得点	4	4	3	3	0	1	1	1	1	0	1	1	1	0

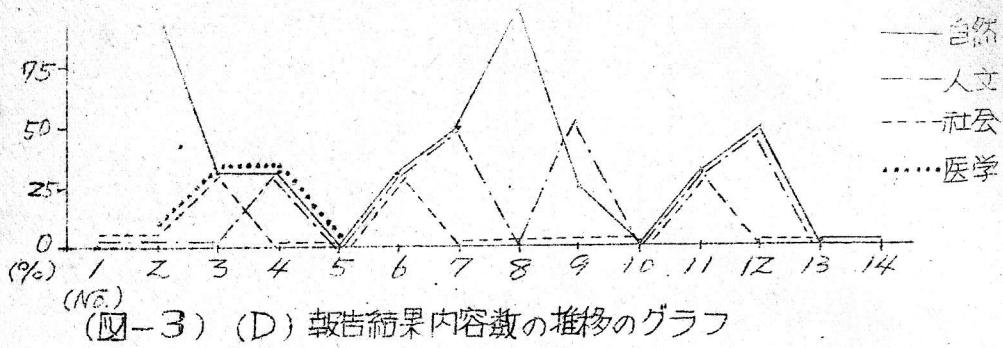
(表F) 調査結果報告の学術レベルの推移(卓)



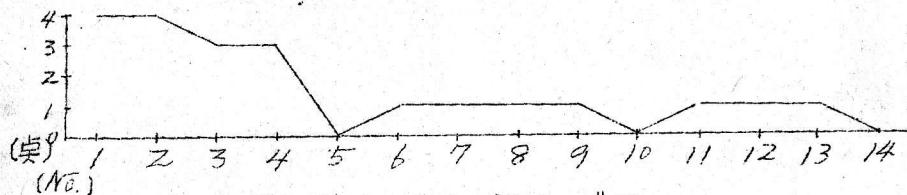
(図-1) (A)(C)(E)についての推移のグラフ



(図-2) (B) 調査計画内容数のグラフ



(図-3) (D) 報告結果内容数の推移のグラフ



(図-4) (F) 学術レベルの推移のグラフ

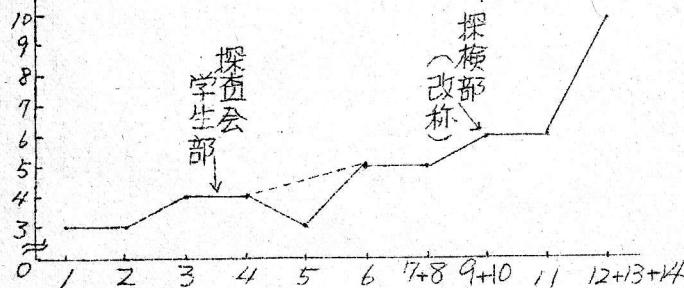
IV. 資料の分析結果に関する考察

先にIII. の〔補記〕に既述のように、No. 5は学術的な内容性が薄いのでこれについてのデータは厳密でない。

〔(図-1) の考察〕

(図-1) をみると、後にゆくほど計画項目の報告（達成）された割合が完璧（100%）ではない。この割合即ち（E）のグラフは大変緩い基準をしているのであって、例えば、少しでも一般報告書に記されて居れば報告されたとみなしているので、当然100%に行かねばならないはずのものであるから、この意味で探検部時代（No. 9～）は徹底した調査が達成されてないと云える。

次に(A) 即ち計画項目数についてみると、このグラフでは大して年代によって変化していないが、これは同時期に行われ、統部員が2～3隊に分かれた調査を含むもので、よってNo. 7とNo. 8, No. 9とNo. 10, No. 12～No. 14をひとつに集計した項目数のグラフを次図-5に記す。



(図-5) 計画項目数の変化グラフ

これより計画項目は着実に伸びているが、この理由は2つある。

- (1) 部員数(系列員數)の増大
 (2) 内容数(系列數)の増大

(図2)(図3)の考察

上述の(ス)内容教員の増大、を支持する根拠は、(図-2)に示すように、No.1～8を通じて優位であった自然科学系列調査は、No.9以後人文科学系列調査と一線になってしまっている。即ち、探検部に改称されてから、自然科学と人文科学が逆に度に調査されただと云うこと、社会科学系列調査も益々になって来たということを示し、これは明らかに、部員に学部構成の推移の反映に他ならない。

この推移とともに、(図-3)報告結果数も減少していることは先に述べたが、内容からゆくと、自然科學系列調査も減少して、人文・社會科學系列調査も一様でない。

〔図-4〕の考察

上述の複数の强力な考察が(図-4)で成される。No.1～No.2では有志者参加のために実行報告レベルの高いのは当然であるが、学生主体となつていろいろ調査No.3～No.4では、この実験をよく継承し、やはり実行レベルは相当高い。No.4からが探査会学生部によるものであろうから、探査会学生部(No.4～8)では、前期ではよく学術レベルを継承しているが、後期では、一貫申請書だけの実数であって、探査部に改称(No.9以後)してからも心配で、かえって調査不充分と云える。

以上のことからして、人文一社系科学系列の増大と、学術レベルの低下とはよく比例の関係が成立することがわかる。

次のように結論することが妥当と云える。

- (1). 自然科学系調査は探査会前後ほど徹底して行なわれなくなった。
(2). 人文・社会系調査は調査結果が徹底して報告されていない。
(3). (2)と対照して、人文・社会科学系論壇を「探査」に導入すべき方法論が見い出されている。
(4). 全般に、(図-1)に見られる項目数の増大は、(図-4)に見られるように実質を伴わず、この意味で、「充実」と云えるものでない。

V. 安的檢討

IVの考察から大変きびしい結論が導き出されたが、すでにIIIの結果に至る方法において、数々の検査を行なったことを鬼い出して頂きたい。即ち、我々の検討においては、次に検査された種々の問題に上向しなければならぬ。

IIの資料の客觀化に対してすでに(F)の「調査結果報告の學術レベル」この数量化が正しく學術「レベル」を反映しているかどうかは問題となるが、(F)項では、報告書の「質」をすべて外的要因を考慮する相島とである。何よりも、この(F)項では、報告書にすべて一要因を考慮する相島で量を表していいない、例えば、「一般報告書に立てる生物群島の研究」(オニカモ群島)では、生物群島の研究としているが、このことは、オニカモ群島の研究としているが、こうしたことは無視している(オニカモ群島)。

しかし、午後は伊東芦一氏（S.37卒）が「O.B.の方々から見て我々学生部の精神が大きいにあらるのではないかと思われますが」（横浜市大探査委員会報 Vol. IV ~ No. 10）

と表現する時矣から（氏は「科学する精神の欠如はO.B.の指導によって補ってゆきたいこと」と結論している）。先の生物調査報告の「序」に見られるような「この調査報告が……探検部の研究観を奮起させる一石となりますなら」と表現される時矣に（編者山崎君は部外者であることに注意）、変遷しているのである。

かくのごとき変遷の理由はN.の考察によつて次のように云える。

(1) 探査会前期の学術調査は自然科学系列、特に生物学的調査を主流として来たが、この「学術性」とは実質的に異なると云える人文・社会科学系列調査が主流となって来たこと。

(2) 同時にフィールドに、「調査」を主体とし、その中に「冒険」を見出すことが困難になって来た。

特に(2)の觀点は、「探検精神とは何か」と云つた論題が活発に討論されるようになった理由であり、人文・社会科学系列調査においてはN.11「小保京丸隻落調査」に見られるように科学精神の前提たる「冒険」精神が欠如し、探検部は一種の「調査部」のようなものになつた。（S.41.10.11「未知への挑戦」鈴木宏尚「百分のしたかた探検活動」参照）それは何よりも、「探査」なるイメージと結合していた「自然」なるイメージの欠如であつた（「自然」と「社会」の概念的分離というドグマを考慮して）。

我々はこのようにして、新たなるオーダ階に再び上向して来た。そして、新たなるオーダ階の幕前を通じて、人文・社会科学系列の探検方法論を早急に確立することが問題で折ることをみて来た。この探検方法論は、未知への欲求が正しく発現し科学精神となつて現象するために、特に人文・社会科学系列調査はどのような研究活動を行なうべきかという基本的问题に集約される。

この過程において、探査部が「調査部」のような枠内になるべきでないとうことが、本稿によつて結論されることである。まして何回かの海外探査を行なつた所で問題はむろん解決したことにならぬ。

地味な研究の積み重ねによつて資料をたくわえることであろう。

この研究のために、部の主流を再び「自然探査」一例えば、海底探査、洞窟探査、氷河探査、原野探査等に拡大強化することが我々の部にとつて一度は通らなければならぬ過程であるに違ひない。

〔補註1〕 医学系列については何生記さなか、たゞ医学が重要でないと考えたことではなく資料不充分というより部員（会員）が前期のみで現在ほとんどないという理由によるもので残念であることを記しておく。

〔補註2〕 探査会と探査部を分離して捉えたことを了承しておきたい。本来、探査部は探査会の継承である。

〔補註3〕 1960年（S.41.1）に派遣されたオニ次フィリピンパラワ島調査隊が安家川流域調査についての報告は検討中であるので差擱してない。

VI. 終わりに

上で述べたように、本稿の目的は、客観的把握においているが、充分な把握はなされていないと云える。また、拾取された全てを語りつくしたわけでもないが、このことは一つの新たな資料提出によつて新たな活動の再生を期待する。即ち主体は現実にある。

方法の問題。探査なるイメージを冒険と調査（又は未知と科学）の2つ

に固定しない。これらは相互に転化し相互作用の場にある。主体は改革に
おかれ（改革即現実）。

外部的つながり。部内と部外の2つに固定しない。部は外部と相互作用
の場にある。ここで粗い近似を行なう、た一平均的近似。

以上2つをつけ加えておきたい。

今後の部活動への問題提起

理四 大江達彦

横浜市立大学探検部も探査会が設立されて約十年になる。また部全体としての探検という考えがあやふやになり、そのため部活動すべての面において安易に考え、安易に行なわれる傾向が強く感じられるようになってしまったので、この部報を発行するのと夏の合宿が近づいたのを機会に我々部員は今までの探査会（以後「会」と呼ぶ）探検部（以後「部」）の歴史を客観的につかみ、学びとれることは学びとて今後の部活動に役立てていかなければならぬ。そこで探査委報、部報その他の資料を持ちより、今後の部活動はいかにあらべきかを私なりに考えてみることにする。

会ができたときの趣旨は、その会が生物教室を母体としていることからも明らかのように「生物学をやつていく人達が野外の生活に親しみ、その目的としては「山」の科学的研究及びそれに伴う技術を身につけることとしてすなわち科学的に山という対象にとりくもうことである。そして学術的研究（特に生物）に重きがおかれて、それは学生論集その他の明瞭なように設立当初から二、三年は非常によく研究活動がやられてきたと思われる。またその内容に関しても今のように学生だけの部ではない強みもある、て高いレベルに立っていた。

しかしオーワン回探査が三宅島の湖沼調査であったように、会がかけた「山の……」ということはもうそこで崩れてしまう結果となつた。それは山という対象のせきさからも無理なようであつたと思われるし、また会は山だけでなく広範な対象を総合的にとらえる会にならなければならぬといふ要求からであった。このオーワン回探査において会の性格は大きく決められ、「山」という代りに「未開発又は未調査地域」と書きかえられた。

またオニ回の知床半島の調査において部の方向を大きく決めることが行なわれた。それは簡単にいって、「小さく深い」から「大きく浅い」という変化である。すなわち一つの島の一地帯を選んでそれを学問的見地から深く見ていくことから、知床半島という対象を表面的に見ていくという変化である。この時奥においてそれ以後の会及び部の性格形成がある程度なされたといつていいのではないかと思う。しかし、その当時の会としての考えでは、その大きくなりつつある対象をどこまで広げ、それをどの方向に向け、そしてどう発展させていくかはオーワン回、オニ回探査ではす、きりとしたものが確立されずにすんだ。

このような中で我々の先輩たちは「探査とはなんにか」を考え、そうして会の精神的支柱を作り上げるために努力したのですが会設立二年目にして会活動が停滞してきた。その原因の主要なものとして会が学生、教授、OB、を柱にしてなりたっていたところにあったと思われる。すなわちその構成人員内の意志の疏通のため多く集まることが要求されるが、時間の制限さ

れる教職員、OBと比較的時間の自由な学生との間には必然的に活動面でのひらきが出てきたと考えられる。そこで学生の積極的な活動を伸ばしていくために学生会への活動を組む必要が求められた。そうして探検部の本当の意味での母体である探査会学生部ができた。そしてその始めの趣旨としては会と学生部とは独立して存在するのではなく、思想をその他精神的な事を主にして从から学びつつ、学生の独自性をそこなうことなく活動することにあつた。

その後学生部は北上川、大雪山、江川とやり、その後探検部と変名し、男女群島、朝日連峰、北海道開拓部署、パラワン島、台湾とやってきたわけであるが、まず学生部が探検部に変った事は大臣名が変り、その時東洋存在があやざまれていた公から形式的に独立するだけのことで、問題の本質的性質ではない。

以上が簡単な部設計からの歴史である。表面的に流れてしまつてその思想的問題まで入れなかつたのは著者の不動産のせいであつろう。

それで一、二の重要な出来事についてもう少し詳しく書くことにする。まずオ一に学生部ができた時の部の停滞、オニに我々が新しく記憶している部になってからの活動における困難について。

だが否定期的な面ばかりではなく、今まで部が隊を出したのに比べ、その計画性において格段の差があり、こつらは見習うべきではなかろうか。また他に隊の出し方において、前に述べたように今後の部では明瞭かに回遊しているのであって、それらはこの夫山の計画をもと検討して変

ていくに必要があるのではないか。又、調査項目が生物主体にしばられており、専門の先生をついておられたのは強みであったと思われる。それにこの計画は数年にわたる長期的なものであり、これを見習う必要があると思われる。

次に実では一番大きな問題は何度も言っているように、一つの隊を出するために部全体の協力なしに行なわれた事、これはその地へ行きたい者が集って行くのであって、部の要求することを調べるために要求する人物が行けない状態にあちいりやすい。そもそも部にならぬから、求めることはないが。

ただ今年の状態を見ればわかるよつに夏が来たので行くといふ様なことは今まで続いてきた。このあたりで一段上へ上がりますよう長期間（数年）の計画くこれはたゞだ東南アジアをやるものではない）を見て、その線にてて必要は広い意味での訓練をやつ行く必要があるのではないか。しかもその長期の計画には調査ということが付いて困ると思われるが、それは我々学生の力量をよく見（それはある程度向上するが限度は見えている）その力量ですることができ、一つまとまったものが得られることが理想である。

今までの調査隊を題みまど私自身が見ても調査と名付けるにははずかしく、もちろん専門家が見れば問題にされないような物が多くいた。もちろん人によって「調査」という語にはいろいろ考えがあると思われるのを一概にはいえないが、少くとも調査というからには一層以上の立場を偏べて行ない（もちろん時間だけの問題ではない）教訓の実地練習を通じて行なわれるものと私は思う。学生の内ではそれは不可能といふかも知れないが、それは個人だけを見ている人であつて、ある目的をもつた日本が突き進む力を知らない者の考え方である。必ずできると思う。今まで何が調査だといつ固定観念がさき上っていくて、それで自己満足していたのではないかだろうか。これでは部の発展などありえない。

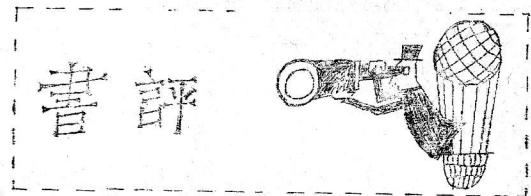
今にか問題提起のようになってしまったが、今年の夏の合宿を機会に部全体でまとめてこの問題を話しあったよりないと考えるがいかがであろうか。
(ア)

白 穎 中 尉

鈴不宏尚

びそ治論と尉白にト守ばへと
文ああすのめ三櫻行景正の如し
久つる前部。美は北に妙
六下。段司結の不端もさし
ひ隊の開、海之行幕島の行流
中軍を走りも居一大干北に間
ま、入勤方にうの司、のる年
生はに運び然、と郡しこ寥
のの國の偶々。流
村に導き、氏にいる。大倉、レミ
浦し敷行、期。あつて、マ留子
金ぶる島、時。で、み鎧せ、残様
県目あ干に同れの、邑に御の
田が、種。マ、鳥、前頭時
秋彼校や北る、表しの、面白
と、官使は、討つ、邊陸争。白
道者、七備で、征。北は戦に。
ハ、成なく、びかと防が、発。下、不
言、兵養に、ゆう風、この路も。瀬
秋彼校や北る、表しの、面白
と、官使は、討つ、邊陸争。白
道者、七備で、征。北は戦に。
本が堅、退的、運の加はしの、すの
白腕るこ、下島、白日、こあ
名、下、不、い、不勤干、時、る、で
と、官使は、討つ、邊陸争。白
道者、七備で、征。北は戦に。
瀬白下、島、還も、瀬翁と
白腕るこ、下島、白日、こあ
名、下、不、い、不勤干、時、る、で
と、官使は、討つ、邊陸争。白
道者、七備で、征。北は戦に。
尉小惑現の行会、一くとも、もを、い
中幼早、尉鳴義の行川、尉活こ
白了、こち瀬て奉は、島隅上、司居、
あしら白しの類、す、郡穴述

上生生活が暮しだったのである。明治44年11月3日ニ一港を出航し、見事に南緯80度にまで到着する。このことは不可能となつた。白瀬中尉は、前進の氷原を「大和雪原」と命名した。當時白瀬中尉は知らぬが、1ヶ月前にアムンゼンが、1日前にスコットが「開拓丸」の極地に達していたのである。スコットやアムンゼンの船が「開拓丸」の石へ此處を訪ねて見ると、そして探検について関心の高い日本の人々と居る所へ、装备制造も烈風はものであつたろう。これからよくやつたものである。



「生と死の妙葉」 レーチエル・カーソン著 松橋 隆司

「みみずの代用食」と代した一口話が「週刊文春」5月1日号にのつていた。それは次のような話しだす。た。

——ワシントン国立動物園長リード博士が頭を悩ませている大問題がある。ミミズの不足、そのためミミズを常食としている動物が謀殺失調にかかるところだ。

そこで急速運営委員会。その席上である委員がいった。「スパゲッティをセントチに切りみみずと同じ味をつければ、動物たちに見分けがつくまい」——拍手。

この案はただちに採用されたが、さて、ヒューラン先生は思案なげ首。なぜなら、本物のミミズの味を知っているものなど一人もみらんからだ。

そして、この記事を書いた人は「猫の首に鉛をつけるのは誰れか」という言話しである。と結んで、話しあは笑いのうちに終つてしまつた。だがこの書の著者レーチエル・カーソンの話は、笑いか終つたその空虚な空気のなかからはじまるのだ。「土壤の沢山の生物がうごめいているが、なかでも大切なのは、みみずだろう」と著者は話し始める。「テヤールズ・ダーヴィンの計算によれば、みみずのかご地表につまる土の量は、10年に1インチから1インチ半くらいのあつさになるといつ」(著者はダーヴィンの「みみずの活動による栽培土壤の形成」ならじにみみずの習性の観察)をあげてある。そうして穴ぐらは、土壤を風化し、水はけをよくし、植物の根がよく通るようにする。みみずがいればこそ土壤バクテリアの活性作用はまし、土壤の腐敗をくいとめるのだ。みみずの消化器系を通るうちに有機物は排泄物によって土壤は豊かになつていく。みみずばかりではなく、「信じられないくらい沢山のいろんな生物が種みついている。もしもさうでなければ、土は不毛となり死にはつてしまつ。無数の生物がうごめいていればこそ、大地はいつも線の衣でみめられている。」

このように土壤の世界は、さまざまな生物がありなす系によって、それがたがいにもらつもたらつしている。さまざまな生物の微妙なバランス。このバランスがあればこそ自然の偉大なあゆみといふことがありうる」と

著者はいふ——「DDTの殺虫や除草のための使用がこれまでや
いる。そしてなまかに、土壌の中に入った殺虫剤は1ヶ月や
2ヶ月で消えてしまう。」
「アメリカの場合は、
コ烟でやさきを年々減らすと、酸素が検出され、その含有量は、
1932年から2年後には2倍以上も増えている」といつ。
もはやミニスズバゲツの代用されなければならなかつた理由を説

— 新潮社版 430 円

部 史

- 昭和 33年 2月 探査会発足 (会長 福井玉夫教授)
 8月 三宅島 (新鷗・大路) 調査 (団長 福島博 他22名)
- 34年 7月 知床半島学術調査 (団長 福島博 他34名)
- 35年 1月 八方尾根雪上訓練
 7月 神津島調査隊 (隊長 伊東芦一 他7名)
 11月 探査会学生部発足 (部長 横山宣雄)
- 36年 2月 興日光雪上訓練
 5月 西丹沢山岳訓練
 7月 北上川水系調査 (隊長 伊東芦一 他12名)
 10月 那須鏡沼調査
- 37年 4月 (部長 松橋隆司)
 5月 尾瀬雪上訓練
 7月 大雪山扇ヶ原調査 (隊長 寺島和光 他6名)
 11月 部長 河合武臣
- 38年 3月 苗場雪上訓練
 4月 (部長 山口由則) 松橋隆司に途中で交替
 5月 北八ヶ岳山岳訓練
 7月 鶴渡根・地内歸調査 (隊長 木村努 他11名)
 江水水系調査 (隊長 河合武臣 他7人)
- 39年 3月 興日光雪上訓練
 4月 探査会学生部改め探險部となる (部長 松本芳樹)
 5月 多度川伏一ト下リ
 7月 第一次男女群島調査 (隊長 松本芳樹 他11名)
 朝日連峰北高周間調査 (隊長 堀田耕造 他10名)
 10月 小俣京丸集落調査 (隊長 堀田弦 他7名)
- 40年 3月 吾妻雪上訓練
 4月 (部長 普田弦)
 5月 南アルプス山岳訓練
 8月 フィリピン・パラワン調査 (隊長 普田弦 他4名)
 第二次男女群島調査 (隊長 遠藤絢一郎 他8名)
 北海道雄武集落調査 (隊長 山口由則 他4名)
 丹沢山岳訓練
- 41年 4月 (部長 遠藤絢一郎)
 5月 興多度山岳訓練
 8月 フィリピン・パラワン島沖ニ次調査 (隊長 合田壽 他4名)
 台湾蘭嶼島調査準備 (隊長 遠藤絢一郎)
 (神津島合宿)
 安家川と洞窟調査 (隊長 名和裕美 他7名)

昭和41年 9月
11月 パラワン隊帰国
(部長 合田壽)
役員改正

42年 2月
4月 蘭嶼調査 (隊長 遠藤絢一郎 他3名)
(部長 井笠邦明)

41～42年度活動報告

41年度(1966)4月 前期総会 (部長 遠藤絢一郎)
4月 23日 新入生歓迎会 (シハ。這子海岸における)

- 29
3
5月 2日 新入生歓迎会宿 雲取山
リーダー 安藤 他 菅田・遠藤・大江・
合田・名和・井笠・天下・新井・鷺岐・
大橋・関根・藤本・藤山・丸井・山本
- 14日
15日
21日
パラワンシンドジウム
部会にて夏期探査をパラワン・台湾・
安家の三地域において行うこととに決定
スライド映写会 (一次パラワン・男1男
女)
- 6月 6日 台湾準備会をひらき 正式に遠藤他5人の
隊員をきめる
- 10日
安家の調査の隊員、名和他8人に決定
名和、東北安家へ偵察
- 11日
和見集落調査を7月1日～7日に行うこと
に決定
(夏期探査準備のため実行できず)
- 20日
名和、帰京し偵察報告
- 25日
探査会・探査部合同研究会
(パラワン島調査について)
- 7月上旬
18日
21日
31日
パラワン最終準備
パラワン隊壮行会
パラワン隊、横浜港よりフィリピンへ出発
(隊長合田、他鈴木(光)・出羽・安藤・井笠)
台湾蘭嶼偵察隊出発 東京駅より
(天下・山本)
- 8月 2日
3
8月 2日
安家隊、上野より岩手へ出発
(隊長名和、他大江・小林・峰岸・新井・
大橋・藤本・藤山)
- 14日
24日
14日
26日
9月 1日
12日
10月 10日
安家隊帰浜
蘭嶼島調査隊、神津島へ合宿に出発
(遠藤・鈴木(宏)・津幡・成田)
蘭嶼偵察隊帰浜
神津島合宿終了
パラワン隊帰浜
パラワン隊報告会

- 10月 22日 御坂山塊にあひて山岳訓練
 (リーダー木下、他遠藤・合田・安藤・井笠・津幡・大橋・藤本・藤山)
- 23日 奥多良・香岩鐘乳洞調査
 (新井・大橋・藤山)
- 24日 大学祭 (スリビン・バラワン島、東北・安家川の紹介)
- 11月 6日 後期総会、大学祭反省会、大学祭コンペ
 (部長 合田寿)
- 14日 小金沢連峰にあひて山岳訓練
 (リーダー合田、他遠藤・大江・出羽・安藤・井笠・大下・津幡・新井・入橋・藤本・藤山)
- 26日 丹沢山岳訓練
 (鎌不協)・峰岸・成田)
- 27日 忘年コンペ
- 12月 3日 新年コンペ
- 10日 台湾観音調査説明会
- 14日 関嶺隊、壮行会、追出しコンペ
- 21日 関嶺隊、東京駅より出発
- 28日 (隊長遠藤、他鎌不協・津幡・成田)
- 3月 18日 乗鞍雪上合宿
 (リーダー合田、他松嶋・新井・安藤・井笠・新井・入橋・藤本・藤山)
- 42年度 (1967)
 4月 12日 関嶺隊帰浜
 24日 (部長 井笠邦明)、新入部員 15人
- 28日 新入生歓迎コンペ
- 5月 5日 西丹沢新入生歓迎合宿
 (リーダー井笠、他大江・折井・小林・合田・名和・峰岸・大下・小沢・津幡・新井・大橋・藤本・山本・藤山・成田・秋鹿・東・今井・加納・川野・紙村・小浦井・長谷川・宝田・富早賀・中島・水尾・山口)
- 6月 16日 青岩鐘乳洞窟訓練
 (リーダー藤山・安藤・新井・大橋・成田・秋鹿・東・今井・富早賀・丸茂・山口)

昭和四十二年度 部員名簿

遠藤 純一郎	神奈川県平塚市平塚1687 TEL 21-3752 商学部経営科4年(4047) 神奈川県立平塚江南高校
大江 遼彦	横浜市金沢区六浦町3042-35 大阪府東住吉区西今川町4-45 TEL 702-9324 文理学部生物科2年(4802) 大阪府立今宮高校
折井 亮夫	横浜市金沢区六浦町1528-11 田中光太郎方 長野県松本市堀之内4-12 TEL 3-2505 文理学部生物科4年(4816) 長野県立飯田高校
小林 恵二	横浜市金沢区六浦町1825 高橋莊内 富山県下新川郡入善町小摺戸4969 富山県立入善高校 文理学部地理科4年(4566)
谷田 清	川崎市中原町3-26 737号 TEL 51-8024 岡山県岡崎市301-2 TEL 72-0377 商学部経営科4年(4104) 芝居辰
鈴木 光	横浜市金沢区富岡町2338 守川方 愛知県蒲郡市相原町小山21 TEL 8-3665 文理学部生物科4年(4808) 愛知県立豊橋東高校
鈴木 宏尚	横浜市金沢区六浦町1825 高橋莊内 TEL 70-6885 静岡県浜松市高町137-2 TEL 54-4830 文理学部社会科4年(4589) 静岡県立浜松北高校
出羽 寛	横浜市金沢区六浦町3042-35 北海道旭川市一条14丁目石1号 文理学部生物科4年(4809) 北海道旭川東高校
名和 美裕	東京都文京区小日向台町3-11-1 TEL 947-2800 文理学部化学科4年(4859) 都立神代高校
峰岸 常之	東京都大田区東横谷6-9-21 文理学部化学科4年(4803) 都立小山台高校
宇藤 崇	東京都杉並区下高井戸7-552 TEL 328-0398 文理学部独文科3年(5020) 都立豊多摩高校

井笠 邦明	横浜市保土ヶ谷町仙向町 1324 TEL 33-8025 文理学部社会科3年(5521) 都立江北高校 (叶)水野元
大下 好憲	東京都大田区北馬込1丁目17番6-303 TEL 771-3903 徳島市南二軒屋町西門 1307-10 TEL 3-1774 商学部経営3年(5064) 德島県立城南高校
小沢 幸重	東京都江戸川区六之郷6丁目23-12 田中方 TEL 032-8677 茨城県稻敷郡阿見町大学阿見 3739-13 文理学部生物科3年(5307) 茨城県立水戸第一高校
津幡 光哉	神奈川県中郡伊勢原町東大竹457 TEL 95-0370 商学部経営科3年(5225) 神奈川県立平塚江南高校
新井 駿男	川崎市藤崎町2-150 TEL 22-5455 文理学部地理科2年(6513) 神奈川県立川崎高校
大橋 正敏	横浜市鶴見区鶴見町663 TEL 52-7216 商学部2年(6064) 神奈川県、浅野学園
成田 佳紀	東京都中野区豊ヶ宮 5-7-13 TEL 990-6537 文理学部生物科2年(6814) 都立武蔵丘陵高校
藤本 隆久	東京都江東区亀戸 5-9 TEL 681-6655 商学部2年(6302) 都立両国高校
齋山正一郎	横浜市金沢区大浦町1672 広志方 佐賀県佐賀市柳町 5 文理学部社会科2年(6648) 佐賀県立佐賀西高校
山本 譲司	東京都世田谷区代沢 5-23-8 長野県西筑摩郡松川町七戸 TEL 379 商学部2年(6386) 長野県立松本深志高校
秋底 豊	横浜市金沢区大浦町3938 大内方 高根郡松江町朝日町487 商学部一年(7001) 高根郡立松江南高校
東 邦典	東京都世田谷区代沢2-36-29 若葉荘内 広島県福山市牛田町旭区984 商学部一年(7015) 広島県立広島東寺高校
今井 保弘	横浜市南区大久保町546 愛知県豊橋市岩屋町岩屋下1-2 商学部一年(7046) 愛知県立豊橋東高校

加納 良幸	東京都目黒区中根2丁目12-16 TEL 718-6891 文理学部文科1年 都立玉川高校
川野由美子	横浜市神奈川区三ツ沢南町41 TEL 31-3780 文理学部文科1年 神奈川県立横浜翠嵐高校
紙村 健	逗子市桜山8-2-45 越中谷方 大阪府高槻市芥川町1-8-8 商学部1年 大阪府立茨木高校
小酒井 由美	神奈川県藤沢市長坂838 商学部1年 神奈川県立湘南高校
宝田 俊幸	東京都中野区中野2-24-226 文理学部文科1年 都立豊多摩高校
富宇賀ひろ子	横浜市金沢区平潟町40 瑞川方 群馬県新田郡尾島町柏川522 文理学部文科1年 群馬県立太田女子高校
中島美知代	横浜市保土ケ谷区川島町29の6 TEL 38-1675 文理学部文科1年 神奈川県立横浜平沼高校
長谷川 工	横浜市港北区篠原町2115 TEL 40-4598 商学部1年 弘光学院高校
丸茂 一文	横浜市金沢区平潟町192 瑞岡方 山梨県北巨摩郡大泉村谷戸4123 TEL(大泉)8741 文理学部生物科1年 山梨県立甲府一高校
水尾 寛己	横須賀市田浦町3-61 新倉支方 北海道上川郡美瑛町下申莫別 文理学部生物科1年 道立旭川東高校
山口 幸雄	横浜市南区三春台126 高井重徳方 愛知県葉栗郡木曽川町黒田東針口41 TEL(6)3245 商学部1年 愛知県立旭丘高校

丸山 晃	東京都新宿区東大久保2-309 新宿第二コ-ド51 東京大学理学部応用 生物研究所
花野井忠司	日大三島高校
一戸 正憲	川崎水道局
寺田徳太郎	日本窒素中央研究所
大野 達郎	長野県北安曇郡白馬村 白川小屋
奥田 耕造	東京都太田区久ヶ原1070 酒類醸造 40年度商卒 TEL (152)4030 報国モニーン
島村 健二	千葉県市原市 油井戸2297 40年度理卒 湿津中学教員
篠原 道雄	香川県高松市天神前1-9-13 40年度商卒 百十四銀行
田村 瑞穂	沼津市香貫町八重104 40年度理卒 市大医学部技術更員
中田洋一郎	横浜市保土ケ谷区南希望ヶ丘6 TEL (92)4148 40年度理卒 栗田工業
山口 由則	福岡県直方市大字下境宮洞 県職員 鷹取寮 40年度商卒 福岡県庁
松本 芳樹	香川県綾歌郡綾南町陶猿王 TEL (702)0961 40年度商卒 香川相互銀行
三橋 孝子	東京都世田谷区玉川尾 40年度理卒 東京都水道局

森谷 常生	東京都北多摩郡羽村町見東565 40年度理卒	早大大学院
者藤 悅	横浜市保土ヶ谷区帷子町2-85 TEL(43)0794 医学部4年	
堀 宏輝	大阪府布施市近江堂413 又保西方 TEL 布施(22)1188 41年度商卒	代議士辞書
菅田 強	東京都立野市多摩平園地81-301 41年度文卒	中学校員
高松 康夫	川崎市丸子通2-707 41年度文卒	TEL (22)6068

関係団体住所録

京都大学探検部	京都市左京区吉田本町
大阪帝大	大阪市住吉区移木町459
大阪府大	大阪府堺市百千鳥町4-804
大阪大学	大阪市北区常安町36
立命館大学	京都市上京区中御靈町
同志社大学	" 上京区今出川通鳥丸
関西大学	大阪府吹田市千里山17
関西学院大学	西宮市上ヶ原一一番町
松山商大	松山市清水町2-128
愛媛大学	松山市持田町
福岡電波大学	福岡市下和田字生水
九州大学	福岡市箱崎町
北海道大学	札幌市北八条西5丁目北大學生部氣行
東京農業大学	世田谷区桜丘1-1-1
早稲田大学	新宿区戸塚町1-647
上智大学	千代田区紀尾井町7番
学習院大学	豊島区目白1丁目5-1
姫路大学	文京区小日向町3-4-14
東京大学	目黒区駒場町教養学部
明治学院大学探検会	港区芝白金今里町42 TEL(443)8231 111線270
聖心大学探検部	武蔵野市境5-14-29
東海大学探検学会	涉谷区富ヶ谷2-28-4
跡見寸子短大民教研究部	文京区大塚町56
横浜国立大学探検部	横浜市南区清水4丘

編集後言

探査会時代に発行されていた会報が14号においてとたえて以来4年間、部の機関誌は全く発行されなかつた。その間にも、各隊の計画書、報告書は多數発行されてはいたがそれだけではまだ言いつくせないものが残つた。発行再開の動きは昨年の「未知への挑戦」の発行に始まる。それは文集的な性格が強かつたが、部報発行への大きな刺激となつたことは間違ひない。

昨年のこれから編集を開始し、やっと完成にこぎつけたわけであるが、内容に問題が残つてゐる。経済的なことでガリ刷りで発行したため機械的なものに力をとられること。編集者自身としても技術が未熟であること。一般報告書を併載していいのかといふこと。部としての発行体制が不完全であるなど……。

しかし、部 転換期にさりと、部の方向を模索しようとする動きを表わした文がのせられていることは部報に性格をもたせてくれて、いささか泥縄式に編集したものとして一つの致いでもある。

不完全な部報ではあるが少しまで部の発展に貢献すれば幸いである。

部報	15号	1967年7月24日発行
編集者	津幡光哉 藤山正二郎 川野由美子 山口幸雄	
発行所	横浜市立大学 探検部 横浜市金沢区六浦町4646 TEL(70)8151	